長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第４集

深草遺跡
別当十三塚遺跡
別当遺跡（第２次）
糀屋敷遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

１９８７，３

長坂町教育委員会

峡北土地改良事務所

序　　文

山紫水明の地、八ヶ岳南麓に住む私たちは、この自然のすばらしさとともに、先人たちによりこの地に築かれ残されてきた文化遺産も誇りにしたいものです。

太古より営まれてきた、自然や文化を、未来の人々から批判されることなく、受けつぎ残してゆくことが、今この地に生きる私たちの使命であると思います。

長坂町では、県営圃場整備事業に伴い、埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査を実施しております。本年度は、大八田地区の、深草遺跡・別当十三塚遺跡・別当遺跡、白井沢地区の糀屋敷遺跡の調査が行なわれ、縄文後期、平安、中世の各時期の遺構、遺物が確認され、貴重な資料を得ることができました。ここに、その成果を報告書として刊行し、広く活用していただければ幸いです。

最後に、今回の調査にあたり、御指導いただきました、県教育庁文化課、峡北土地改良事務所関係各位、また、多大な御理解、御協力をいただきました地元の皆様に、深く感謝いたします。

昭和62年３月

長坂町教育委員会

教育長　向井正汎

例　　言

1．本書は、昭和61年度県営圃場整備事業に伴う、深草・別当十三塚・別当（２次）糀屋敷遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は、峡北土地改良事務所との負担協定により、文化庁・山梨県より補助金を受け、長坂町教育委員会が昭和61年７月１日から10月18日にかけて実施した。

3．本書の執筆は、第Ⅰ章を平島長生が、第Ⅱ～Ⅷ章を小田澤佳之、櫻井真貴が行い分担当者名を各項目の文末に記した。

4．本書の編集は、小田澤佳之、櫻井真貴が行った。

5．別当十三塚出土の人骨の分析は、聖マリアンナ医科大学の森本岩太郎、工藤広幸両氏にお願いした。

6．別当十三塚遺跡の全測図及び平面図はシン航空株式会社によるものである。

7．本書の作成及び発掘調査にあたり、下記の方々より御指導・御助言をいただいた。御芳名を記して感謝の意としたい。

雨宮正樹・石井穂・櫛原功一・小林真・坂本美夫・佐野勝広
鈴木治彦・高橋勝広・田代孝・中西信也・新津健・平山裕之
保坂康夫・山路恭之助　　（順不同・敬称略）

8．本調査の出土品・諸記録等は、長坂町教育委員会で保管している。

9．調査組織　　調査主体　長坂町教育委員会
調査担当　小田澤佳之
調査員　　櫻井真貴
事務局　　長坂町教育委員会
坂本正輝
平島長生

調査参加者（含遺物・図面整理）

小沢茂・小沢みずえ・小林登美恵・鈴木節子・清水光子
滝田武子・島畑松代・日向一子・平島弘子・平島富士子
保坂和博・堀内よしみ・谷戸静子・若林松子・小松かずえ

凡　　例

1．各遺構、遺物の縮尺付、各挿図中に表記した。

2．各遺構の方向付、すべて磁北に合わせてある。

3．挿図版、図版に付したHは土壙を表す。

4．各挿図中の遺構断面図上にある数字は、標高を表す。また、断面図の斜線は石を、スクリーン・トーンは焼土を表す。

5．住居址平面図でカマド部分はスクリーン・トーンで範囲を示している。

6．カマドや炉址におけるスクリーン・トーンは焼土範囲を示す。

7．本書で使用した地図は、長坂町発行の1/25,000地形図と、１／1000地籍図である。

目　　次

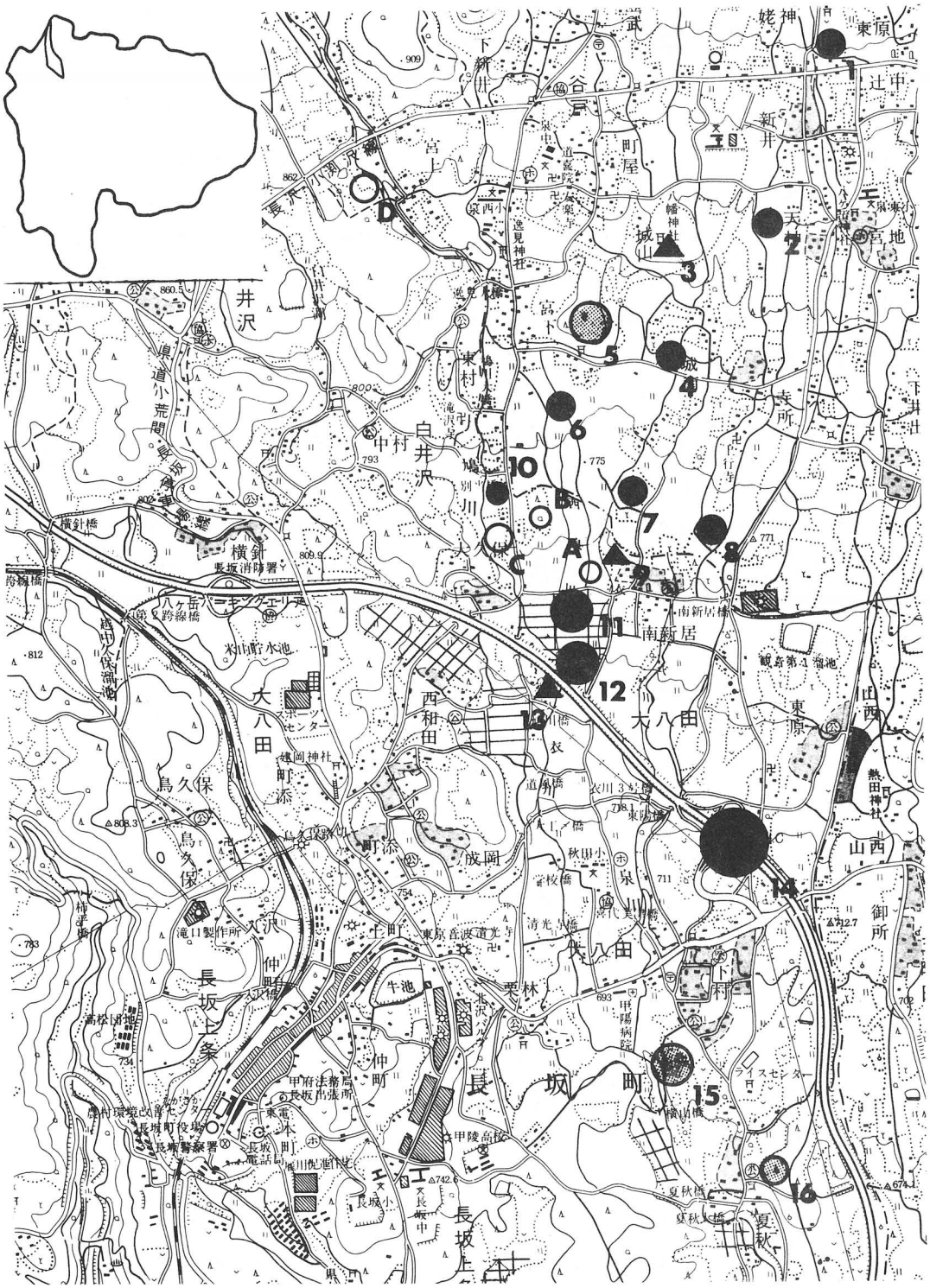
序　　文
例　　言
凡　　例
第Ⅰ章　調査に至る経緯…… 2
第Ⅱ章　調査の方法と経過 …… 2
第Ⅲ章　遺跡の立地と周囲の環境 …… 7
第Ⅳ章　深草遺跡…… 8
第１節　検出された遺構 …… 8
１．住居址…… 8
２．土　坑…… 11
第２節　出土遺物…… 16
住居址出土遺物…… 16
第Ⅴ章　別当十三塚遺跡…… 18
第１節　検出された遺構 …… 18
１．第１号塚…… 18
２．第２号塚…… 18
３．第３号塚…… 18
４．第４号塚…… 23
５．第５号塚…… 23
第２節　出土遺物…… 24
１．土器・陶磁器…… 24
２．石　造　物…… 26
第３節　小　　結…… 26
第Ⅵ章　別当遺跡(第２次調査) …… 28
第１節　検出された遺構 …… 28
１．第１号敷石住居址…… 28
２．第２号敷石住居址…… 28
３．土　　坑…… 28
第２節　出土遺物…… 28
１．第１号敷石住居址…… 28
２．第２号敷石住居址…… 29
第Ⅶ章　糀屋敷遺跡 …… 29
第１節　検出された遺構 …… 29
１．住居址…… 29
２．溝状遺構…… 30
３．屋外炉…… 30
４．土　　坑…… 30
第２節　出土遺物…… 30
１．第１号溝状遺構…… 30
２．第３号屋外炉…… 30
３．第７号屋外炉…… 31
４．第８号屋外炉…… 31

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置……1
第２図　深草・別当十三塚・別当遺跡の立地図……4・5
第３図　糀屋敷遺跡立地図……6
第４図　深草遺跡遺構配置図……9
第５図　深草遺跡第１号住居址実測図……10
第６図　深草遺跡第１号住居址カマド実測図…11
第７図　深草遺跡第１～６号土坑……12
第８図　深草遺跡第７～12号土坑……13
第９図　深草遺跡第13～17号土坑……14
第10図　深草遺跡住居址出土遺物……16
第11図　別当十三塚遺跡遺構配図……17
第12図　別当十三塚遺跡第１号塚第１号塚・第２号塚断面図……19
第13図　別当十三塚遺跡第３号塚・第４号塚断面図……20
第14図　別当十三塚遺跡　第４号塚内溝状遺構・１号土壙墓実測図……21・22
第15図　別当十三塚遺跡第５号塚断面図……24
第16図　別当十三塚遺跡第３号塚及び第５号塚上板碑実測図……25
第17図　別当十三塚遺跡出土五輪塔実測図……27
第18図　別当遺跡遺構配置図……32
第19図　別当遺跡第１号住居址敷石配置図……33
第20図　別当遺跡第１号住居址掘り方実測図…33
第21図　別当遺跡第１号住居址炉実測図……34
第22図　別当遺跡第２号住居址敷石配置図……35
第23図　別当遺跡第２号住居址掘り方実測図…36
第24図　別当遺跡第２号住居址炉実測図……37
第25図　別当遺跡第1・2・3号土坑実測図……37
第26図　別当遺跡土壙墓実測図……38
第27図　別当遺跡第１号住居址……38
第28図　別当遺跡第２号住居址……38
第29図　糀屋敷遺跡遺構配置図……39・40
第30図　糀屋敷遺跡第１号住居址……41
第31図　糀屋敷遺跡第１号住居址炉址実測図…42
第32図　糀屋敷遺跡第１号溝状遺構実測図……43・44
第33図　糀屋敷遺跡第２号溝状遺構実測図……45
第34図　糀屋敷遺跡第1・2・3号炉実測図……46
第35図　糀屋敷遺跡第4・5・6号炉実測図……47
第36図　糀屋敷遺跡第７号炉実測図……48
第37図　糀屋敷遺跡第８号炉実測図……49
第38図　糀屋敷遺跡第1・2・3・4号土坑実測図…50
第39図　糀屋敷遺跡第5・6・19号土坑実測図……51
第40図　糀屋敷遺跡第7・8・9・10号土坑実測図…52
第41図　糀屋敷遺跡第11・12・13・14号土坑実測図……53
第42図　糀屋敷遺跡第25・26号土坑実測図……54
第43図　糀屋敷遺跡第15・16・17・18・22号土坑実測図……55
第44図　糀屋敷遺跡第23・24号土坑実測図……56
第45図　糀屋敷遺跡第１号溝出土茶臼実測図…57
第46図　糀屋敷遺跡第３号屋外炉出土土器……57
第47図　糀屋敷遺跡第７号屋外炉出土土器……57
第48図　糀屋敷遺跡第８号屋外炉出土土器……58

表　目　次

第１表　深草遺跡土坑一覧表……15
第２表　糀屋敷遺跡土坑一覧表……59



第１図　遺跡の位置（１／25,000）

第Ⅰ章　調査に至る経緯

昭和54年から行なわれている県営圃場整備は、水田利用再編対策、作物体系の確立、農地の集積による機械化と省力化等、農業生産基盤の確立をもって農業振興を図ることを目的としている。長坂町における県営圃場整備は、昭和58年度から実施され、すでに、第２工区（大和田地区）、第６工区（夏秋地区）の27.5haが完了している。

この間、圃場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査は、昭和58・59年度に小和田館跡、昭和60年度に小和田北遺跡、別当遺跡が調査され、多くの成果を得ている。

昭和61年度県営圃場整備事業は、第１工区（白井沢地区）2.1ha、第２工区2.0ha、第６工区4.0haが計画され、昭和60年12月、長坂町教育委員会が現地踏査を行なった結果、第1工区糀屋敷遺跡で縄文後期の土器片を中心とした散布が認められた。第２工区では、前年度調査された小和田北遺跡の北側に深草遺跡が隣接し、別当遺跡は同一尾根上の南側へと集落が伸びている可能性から別当遺跡２区として継続的な調査を必要とした。この後、第２工区に所在する原田山が埋土として使用されることになり、計画上全山が削平されることとなった。この原田山には、別当十三塚遺跡があり、南北に連なる11基の塚を確認した。

以上の結果より、山梨県教育庁文化課、峡北土地改良事務所と協議を行い、本調査を実施する運びとなり、調査対象面積は、14,300㎡として調査主体は町教育委員会があたることとした。

昭和61年１月７日、昭和61年度文化財関係国庫補助事業として県教育委員会へ計画書を提出、昭和61年４月18日交付内定を受ける。同７月10日補助金交付申請書を提出する。また、昭和61年６月２日峡北土地改良事務所と長坂町との間で、県営圃場整備事業に伴なう埋蔵文化財発掘調査の負担協定を取りかわし、埋蔵文化財発掘調査実施計画書を提出した。

発掘調査は、昭和61年７月１日に開始し、昭和61年10月18日に調査を完了し、昭和62年３月31日に全ての作業を終了した。

第Ⅱ章　調査の方法と経過

本年度の調査は、数ヶ月のうちに４遺跡の調査を実施しなければならないという事情から、ある程度の２遺跡同時調査と航空測量の一部導入といった調査期間短縮の為の努力がなされた。

各遺跡の調査方法は、別当十三塚遺跡を除く３遺跡については、まず重機による表土剝ぎの後、磁北を基準とした10ｍメッシュのグリッドを設定するとともに、鋤簾による精査を行って遺構を検出し、各遺構の調査を行うという方法で行った。また、十三塚の調査は、全体図及び

平面図については航空測量で行い、その後で各塚を4分割半截して断面図を作成した。図面作成後、塚を全堀するとともに東西南北に小トレンチを入れて、付属施設等の調査を行うという方法が取られた。また、調査は圃場整備の関係上深草遺跡から開始して、別当十三塚・別当・糀屋敷遺跡の順番で進められることになった。

まず、深草遺跡の調査が昨年度調査された小和田北遺跡の北側の削平部分について、7月3日より実施された。しかし、最初は重機の到着が遅れ、人力による表土剝ぎを余儀なくされ、7月14日に重機が遺跡に入ってこの作業が終了するまで、調査はほとんど進展しなかった。その後遺跡の北側より精査を始め、遺構確認を行うとともに、グリッドを設定した。また、精査の段階で、遺跡の南側約⅙程度が湧水の為調査不可能であることなどが判明し、この部分についての調査を断念した。そして、本遺跡で検出できた小土壙や住居址の調査を行った訳であるが、全域にわたって採石などによると思われる攪乱がひどく、検出した土壙の半数前後は埋めもどした。その結果、本遺跡で検出された遺構は住居址1軒と小土壙17基となり、8月3日に全ての調査が終了した。

次に、別当十三塚遺跡の調査が、今年削平により消滅する南側の5基について行なわれた。まず7月1日から4日まで調査の為の除草作業を行い、ついで7月7日と19日にそれぞれ平面図と全図用の航空測量が行なわれた。そして8月5日より、本格的に作業員を投入してて調査を開始した。各塚を4分割半截して断面図を作成した後、残りを全掘して付属施設等の有無を調査するとともに、塚の東西南北に小トレンチを入れて他に遺構がないかなどの確認調査も行った。この調査で塚本体以外の遺構が、第4号より小溝状遺構と土壙墓が各一基づつ検出された。また、この土壙墓よりほぼ1体分の人骨が出土したので長坂警察署に連絡を取り、確認してもらった。そして、全ての調査が終了したのが8月25日であった。

3番目の別当遺跡の調査は、昨年度の調査に引き続いて南側の残り半分が調査対象となった。まず7月18日より31日まで延べ11日間にわたり、重機による表土剝ぎが行なわれ、多くの遺物と遺構と思われるものをいくつか確認している。そして、十三塚の調査終了と前後して8月23日より、作業員を投入して遺跡の北側より精査を行い、遺構の検出を行うとともにグリッドを設定した。また、調査を進めていくうちに東側を中心として、全体的に確認面が実際のそれより高いことが判明した。この為主な地点に小トレンチを設けて遺構の再検出が行なわれた。そうして検出された住居址と土壙の調査が並行して進められた。

本遺跡で検出した遺構は、敷石住居址2軒と土壙3基、土壙墓1基であった。また、この土壙墓からもほぼ一体分の人骨が出土したので、前回同様長坂警察署に連絡を取り、確認してもらった。本遺跡の調査は、予想以上に2軒の敷石住居址の調査に手間どってしまい、また途中にお彼岸休みを3日はさんだ為、全ての調査が終了したのは10月2日であった。

最後の、糀屋敷遺跡の調査は、9月4日より8日まで重機による表土剝ぎが行われ、この時点で複数の土壙状の落ち込みを確認した。また、表土剝ぎが終了した段階で遺跡の西側半分は、

第２図　深草・別当十三塚・別当遺跡　立地図（１／3000）

第３図　糀屋敷遺跡立地図（１／3000）

ほとんど礫層が露出していた為調査不可能と判断した。さらに、この頃になると予定日数を大幅にオーバしつつある為、9月9日より別当遺跡の調査に最低必要な人数を残してすべての作業員をこちらに移して、遺跡の東側より精査を開始して遺構の検出を行った。またこれと並行してグリッドの設定も行った。確認された遺構は9月16日より土壙の調査から始めた。そして別当遺跡の全調査が終了した10月2日から本格的な調査を開始して、土壙、溝、住居址、炉穴と順次調査を進めた。

本遺跡で検出された遺構は、住居址1軒・炉穴8基・溝2本・土壙26基であった。

こうしてせまり来る日程と諸事情による作業員の不足とに悩まされながらも、10月18日に本遺跡の全ての調査を終了した。そして器材を撤収して4遺跡の調査がここに全て完了したのである。

（小田澤佳之）

第Ⅲ章　遺跡の立地と周囲の環境

深草・別当十三塚・別当の3遺跡は山梨県北巨摩郡長坂町大八田地区内に、糀屋敷遺跡は同白井沢地内にそれぞれ所在している。

長坂町は、八ヶ岳南麓の扇状を呈する緩やかな裾部に位置している。三分一に代表される八ヶ岳の豊かな湧水は、幾筋もの水流の源となり下流に向かって合流、分岐をくりかえしつつ、須玉川や釜無川へと流れ込んでいる。これらの小河川は、統合することによりその侵蝕力を強め、標高780～800m付近において幾つもの小渓谷を作り、それらに挟まれる形で南北に細長い低台地や尾根、独立丘陵などを形成している。

本年度調査を行った4遺跡をはじめとして、八ヶ岳南麓では規模の大小はあるものの、同様な地形上に多くの遺跡が存在している。これらの遺跡の内には、近年の圃場整備事業に伴って調査が行なわれたものも少くない。以下において周辺の遺跡について簡単に示してみる。

（第1図参照）

A．	深草遺跡	平安時代
B．	別当十三塚遺跡	中近世の十三塚
C．	別当遺跡（2次）	縄文時代後期・中近世
D．	糀屋敷遺跡	縄文時代後期・中近世
1．	東姥神遺跡	縄文時代中期・平安時代
2．	天神遺跡	縄文時代前・中期・平安時代
3．	谷戸城址	中世城址

4．	城下遺跡	平安時代
5．	前林十三塚遺跡	中近世の十三塚
6．	豆生田遺跡	縄文時代後期・平安時代
7．	金生遺跡	縄文時代前期～晩期・平安時代・中近世（国指定史跡）
8．	寺所遺跡	縄文時代前期・中期・平安時代
9．	深草館址	中世城館址（町指定史跡）
10．	別当遺跡（1次）	縄文時代後期（2次調査と合わせて1つの遺跡）
11．	小和田北遺跡	平安時代・中近世
12．	小和田遺跡	縄文中期・平安時代・中世
13．	小和田館址	中世城館址
14．	柳坪遺跡	縄文中期・弥生時代・平安時代・中世
15．	塚原十三塚遺跡	中近世の十三塚
16．	太口神十三塚遺跡	中近世の十三塚

この外にも、金生遺跡に勝るとも劣らない様な配石遺構が出土した石堂遺跡など貴重な遺跡が多い。

（小田澤佳之）

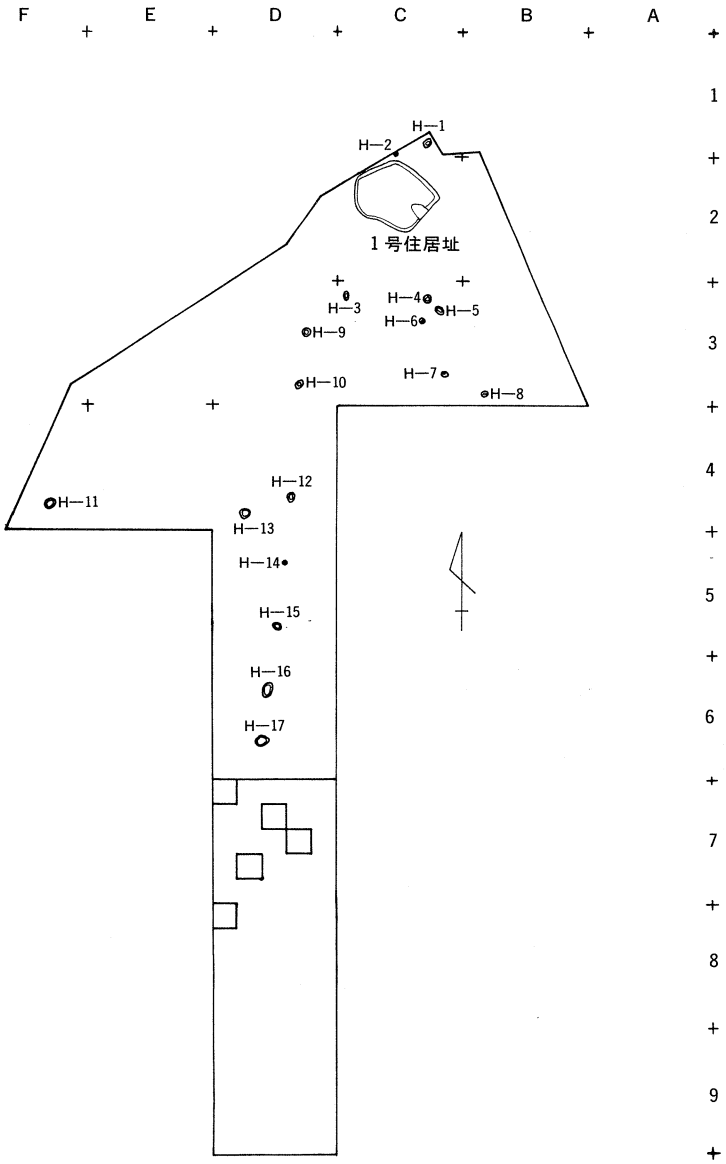
第Ⅳ章　深草遺跡

第1節　検出された遺構

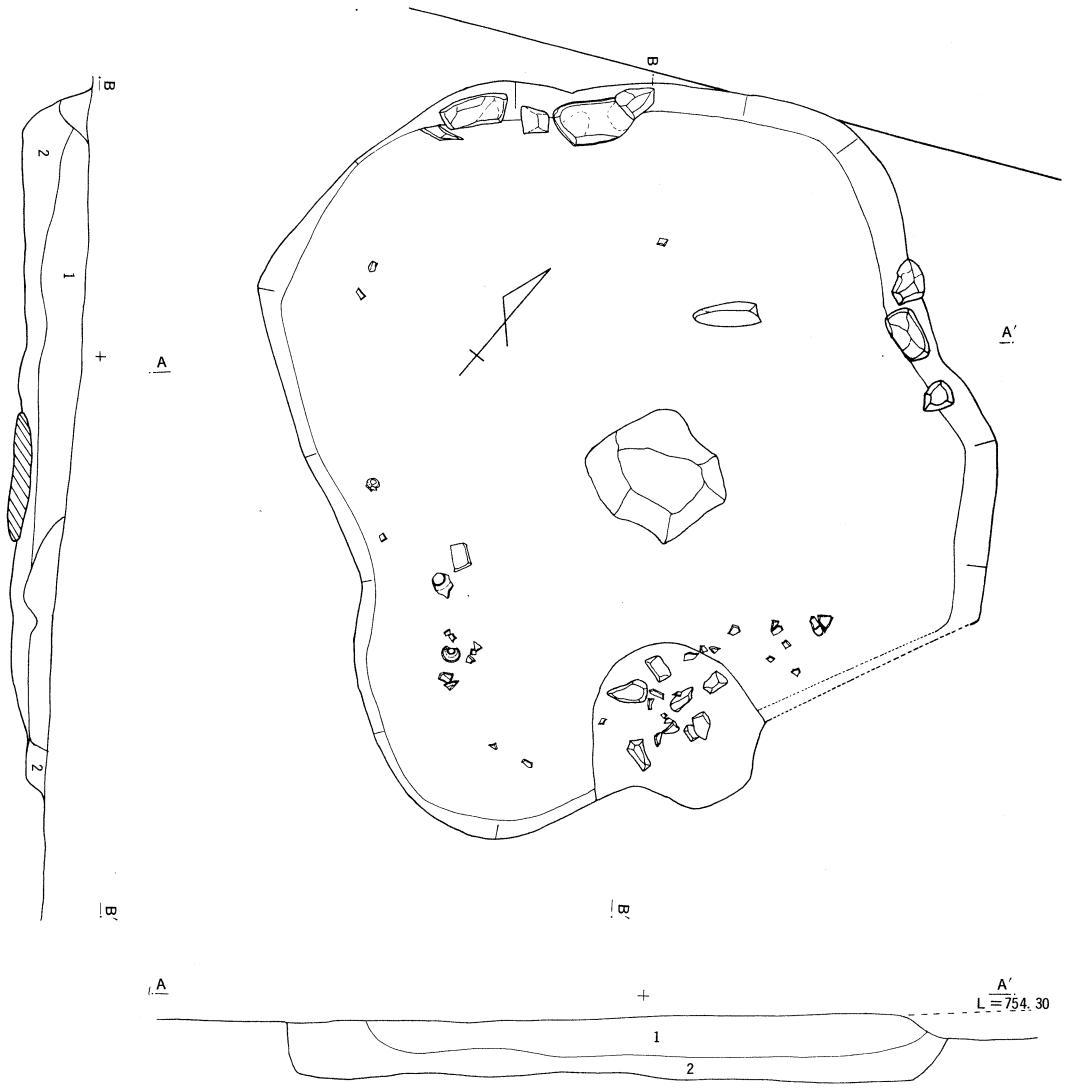
1．住居址（第5・6図）

第1号住居址は、C－2グリット北側に位置する。平面プランは歪んだ四角形を呈し、壁長は約4～4.5m程度である。主軸方向をN60°Wにとり、南東壁にカマドを有する。覆土は黒色土層と黒褐色土層の2層で構成されている。壁は南東壁北側が攪乱を受けてはっきりしない以外は比較的しっかり残っており、壁高はそれぞれ30～40cm程度である。床面はほぼ平坦であるが柱穴や側溝などは検出できなかった。また、住居址中央部に径1m程度の比較的平らな石が配してあった。

カマドは、南東壁やや南よりに位置し壁外に約40cm程度張り出して構築されていたと思われるが、遺存状態が不良ではっきりしない。ただ、カマド上層部からソデの補強に使用したと思われる礫がいくつも検出されており、輪郭をとらえることは可能である。焼土部分は約40×30cmの範囲で確認できた。掘り方は約110cm×90cmの楕円形プランで深さは床面より10cm程度を測る。また、焼土の奥寄りに支脚として使用したと思われる角柱形の石が立ったままの状態で残



第4図　深草遺跡　遺構配置図（1／600）



1．黒色土層　しまりあり、粘性あり、ローム粒子を微量含む。

2．黒褐色土層　しまりややあり、粘性ややあり、ロームをブロック状に少量含む。

第5図　深草遺跡　第1号住居址実測図（1/60）

存していた。

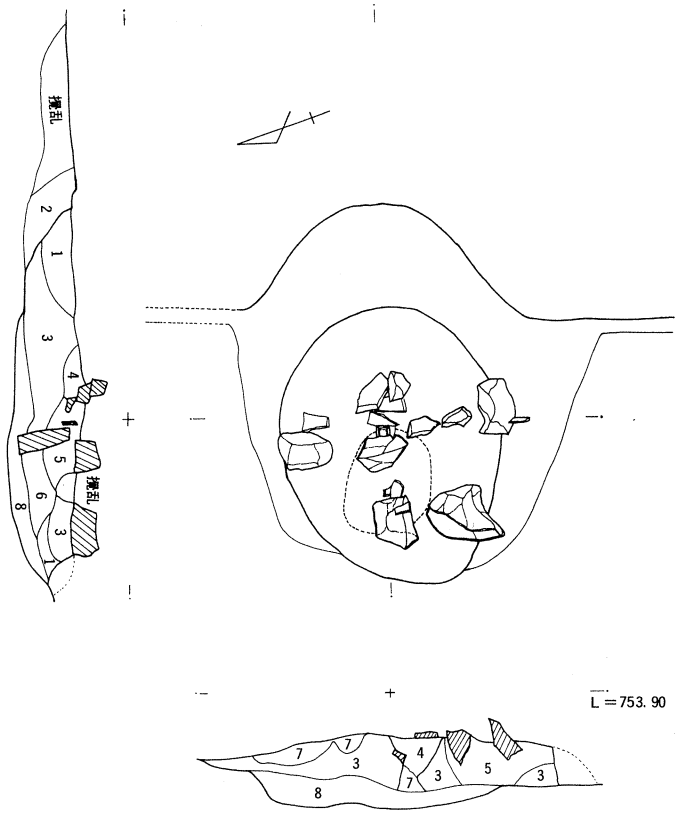
遺物は、本址南コーナーから南西壁付近にかけて、墨書土器を含む坏や台付皿などが出土しているほか、カマド周辺からも数点検出されている。

本址の構築時期は、検出された遺物等より平安時代中頃と考えられる。

2．土坑（第7・8・9図）

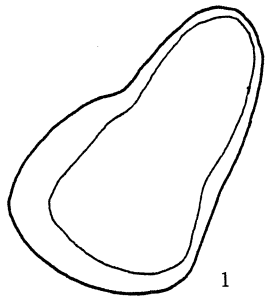
本遺跡で検出された土坑は、全部で17基である。全般的にみて、中型から小型のものが多い。本調査区域内ではこれらの分布や位置関係に関して、ほとんど規則性をみいだすことはできなかった。また、各土壙から検出された遺物もほとんどなく、小破片が数点みつかっているのみで、遺構の時期や性格を推定し得るようなものはなかった。なお、各土坑の計測値等は第1表に記してある。

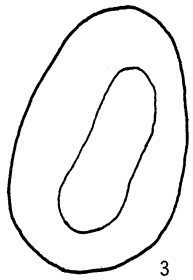
（小田澤佳之）

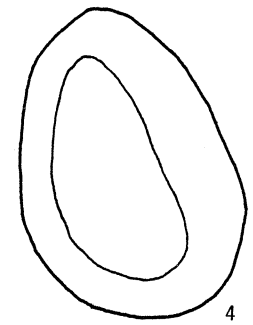


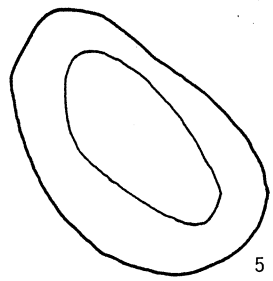
1．黒色土層　しまりあり、粘性ややあり、ブロック状のロームと小石を少量含む。
2．黄褐色土層　しまりあり、粘性あり（地山の一部と思われる）
3．明褐色土層　しまりやや強い、粘性やや強い、ローム粒子と小石を少量含む。
4．黒褐色土層　しまりあり、粘性やや強い、ローム粒子を微量含む。
5．明褐色土層　しまりややあり、粘性ややあり、焼土を若干含む。
6．焼　　土
7．ロームブロック
8．茶褐色土層　しまりあり、粘性ややあり、焼土粒子とローム粒子を微量含む。

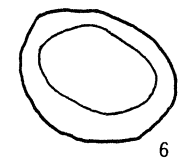
第6図　　深草遺跡　第1号住居址カマド実測図（1/30）



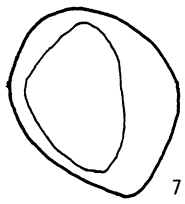


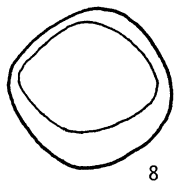


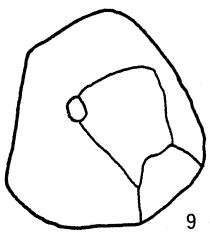


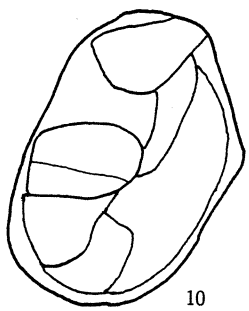


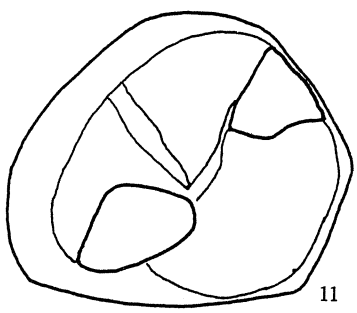
第７図　深草遺跡　第１～６号土坑（１／20）

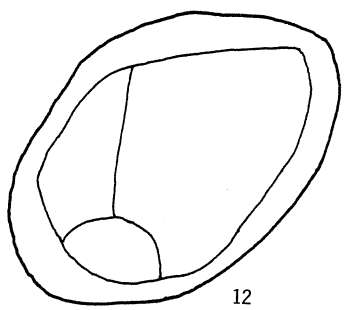




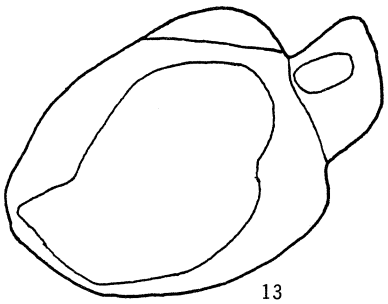


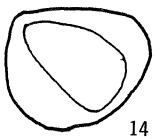


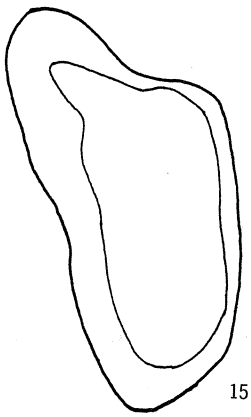


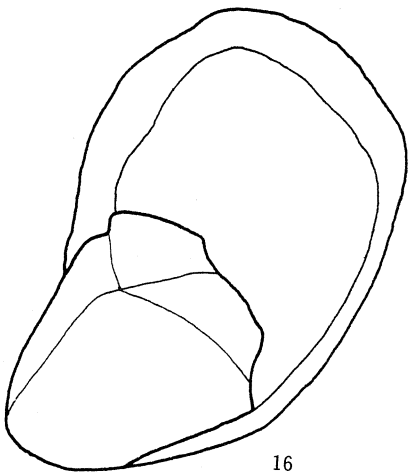


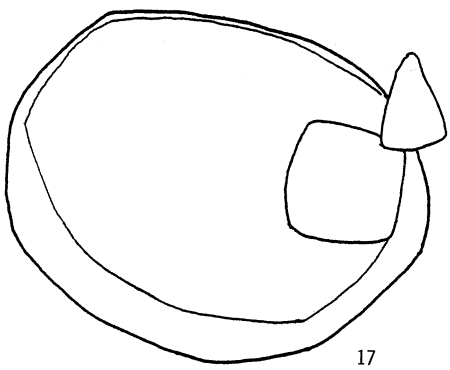
第8図　深草遺跡　第7～12号土坑（1／20）











第９図　深草遺跡　第13～17号土坑（１／20）

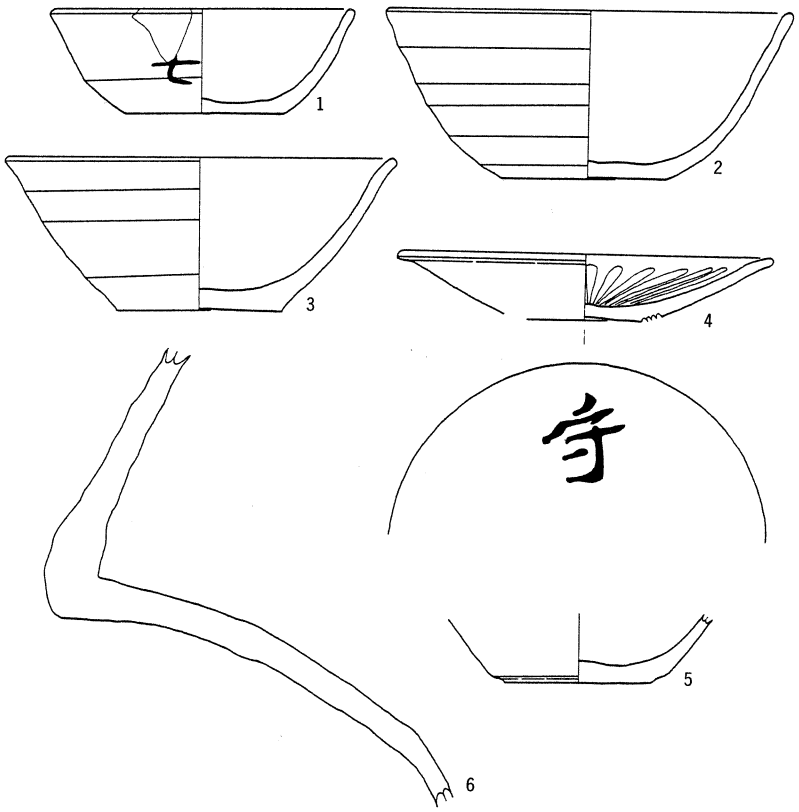
第１表　深草遺跡土坑一覧表

土壙No.	グリット	形　状	長軸方向	法量		備　考
				径(cm)	深さ(cm)	
H－1	B－1	不整円形	N 32° E	83×49	17	
H－2	B－1	楕円形	N 19° E	48×33	20	
H－3	B－3	長楕円形	N 15° W	75×44	14	
H－4	B－3	楕円形	N 9° W	85×57	16	
H－5	B－3	長楕円形	N 45° W	79×50	22	
H－6	B－3	円形形		43×34	20	
H－7	B－3	楕円形	N 35° W	55×46	46	
H－8	A－3	円　形		40	24	
H－9	C－3	不整円形		54×48	33	
H－10	C－3	長楕円形	N 23° E	82×53	32	
H－11	E－4	楕円形	N 65° E	91×83	12	テラス有
H－12	C－4	長楕円形	N 51° E	96×66	14	
H－13	C－4	不整円形	N 62° E	107×68	29	テラス有
H－14	C－5	不整円形		39×31	20	
H－15	C－5	不整円形	N 7° W	90×46	25	
H－16	C－6	楕円形	N 27° E	125×83	23	
H－17	C－6	楕円形	N 23° E	113×87	16	

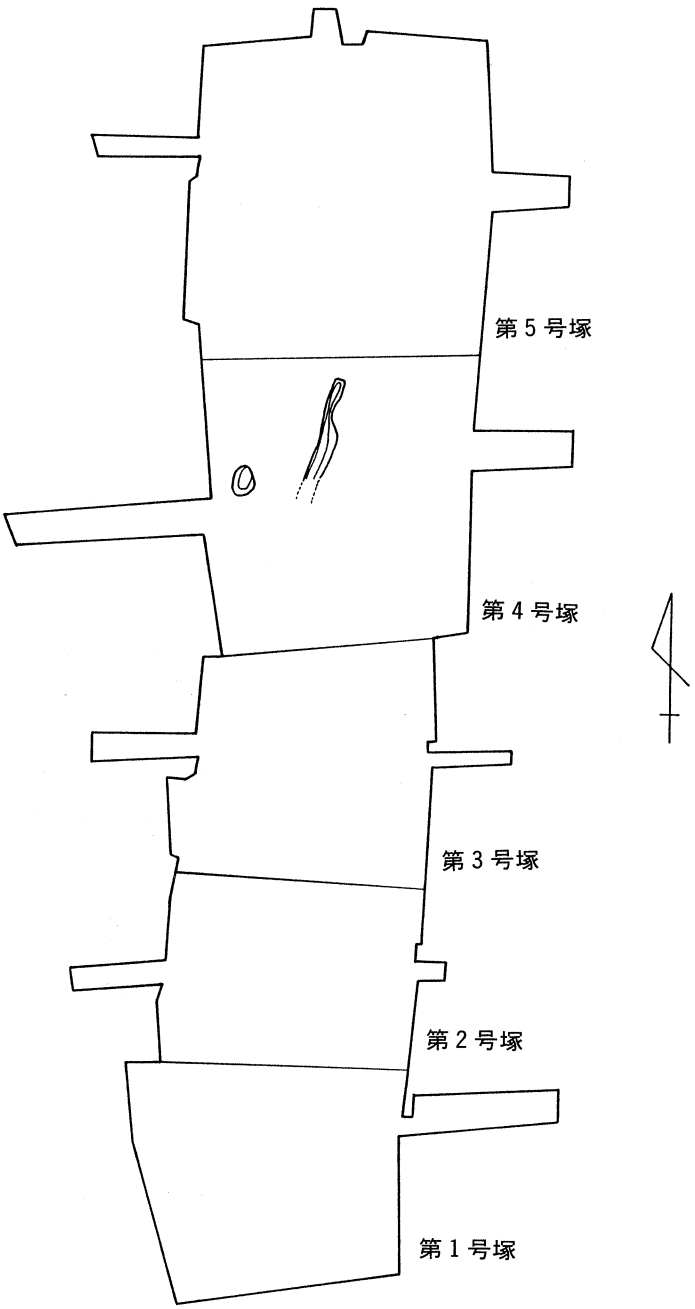
第2節　出　土　遺　物

1．住居址出土遺物（第10図）

1～5は内黒の土師器であり、6は須恵器の大甕の大破片である。1は坏で、口径12.0cm、底径6.2cm、器高4.1cmを計る。外面に「七」の文字が墨書されている。2は椀で、口径16.0cm、底径6.3cm、器高6.5cmを計る。底部から体部下半まで回転ヘラ削りによって調整されている。3も椀で、口径15.4cm、底径6.5cm、器高6.0cmを計る。4は高台付皿で、口径は14.8cm、現存底径は5.0cm、現存器高は2.6cmを計る。高台は全て欠失している。外面に「守」の文字が墨書されている。5は椀で体部中位以上を欠失する。底径は5.8cm、現存器高は2.7cmである。体部下端に小さな稜を有する。6は須恵器の大甕の破片だが径を復元するには至らなかった。肩部から、胴上位にかけて灰釉がかかっている。（櫻井真貴）



第10図　住居址出土遺物（1/3）



第11図　別当十三塚遺跡　遺構配置図

第Ⅴ章　別当十三塚遺跡

第１節　検出された遺構

１．第１号塚　（第12図１）

本塚は、別当十三塚群の乗っている独立丘陵上の南端部に所在する。東西径約5.2m、南北径約5.6m、高さ約0.5mをそれぞれ計測する。形状はほぼ隋円形を呈するが、全体的にくずれた感じで、しっかりした形ではない。また北側の部分は、第２号塚との境がはっきりしないが、これは同塚の盛土が流れた為と思われる。

なお本塚からは、付属遺構と思われるものや、遺物等については何も検出できなかった。

２．　第２号塚　（第12図２）

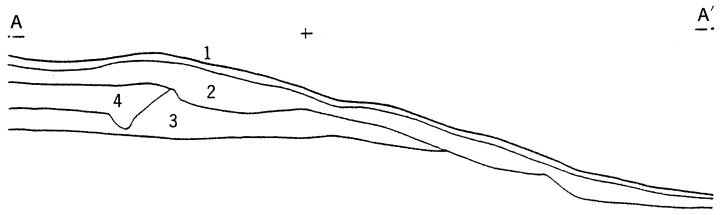
本塚は、第１号塚のすぐ北側に所在し、塚の裾部が重複していてはっきりしない。東西径約5.5m、南北径約4.9m、高さ約0.6mをそれぞれ計測し、形状は隋円形を呈する。本塚の盛土は、ながされており、裾部がはっきりしない。

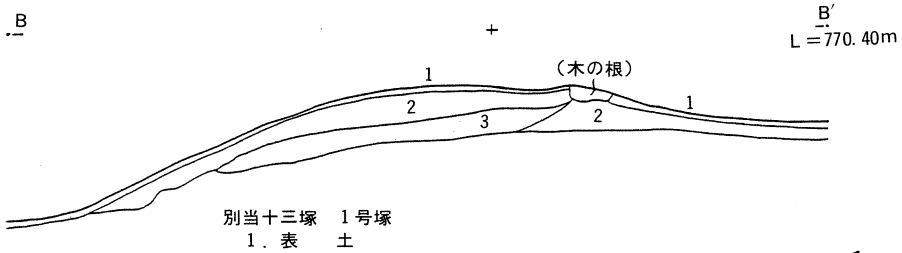
また、本塚からも付属遺構等は特に検出できなかった。しかし、遺物については、陶器片が数点盛土中から出土している。

３．第３号塚　（第13図１）

本塚は、第５号塚に次いで保存状態が良好で、盛土もしっかりしている。東西径約６m、南北径約5.4m、高さ0.8mをそれぞれ計測し、形状は隋円形を呈する。前出の１・２号塚と違い、裾部がはっきりしていて、完全に独立した塚となっている。

本塚からも付属遺構と思われるものは特に検出できなかったが、塚の中央部付近の表土下約0.7m程度の位置から少量の焼土が小ブロック状に検出されており、注目すべき点であろう。遺物としては、盛土中からは何も出土しなかったが、塚上から板碑と五輪塔の空風輪が各１点ずつ検出されている。

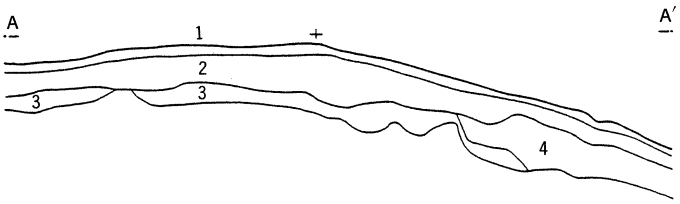


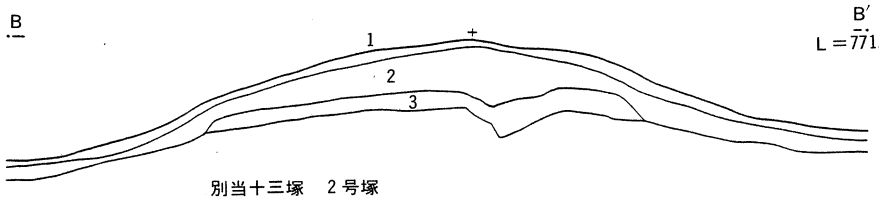


別当十三塚　1号塚

1．表　　土
2．明褐色土層　しまりあり、粘性ほとんどなし
3．暗茶褐色土層　しまりあり、粘性ややあり
4．暗褐色土層　しまりあり、粘性あり

1



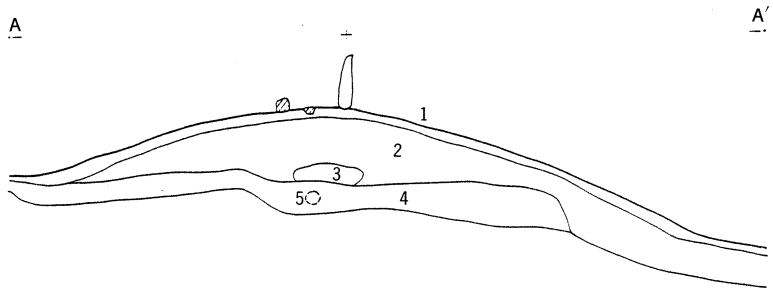


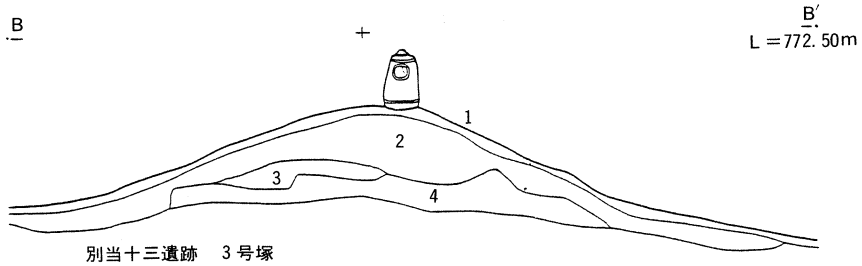
別当十三塚　2号塚

1．表　　土
2．明褐色土層　しまりあり、粘性ほとんどなし
3．黒褐色土層　しまりあり、粘性あり
4．暗褐色土層　しまりややあり、粘性ほとんどなし

2

第12図　別当十三塚第1号塚・第2号塚断面図（1／60）

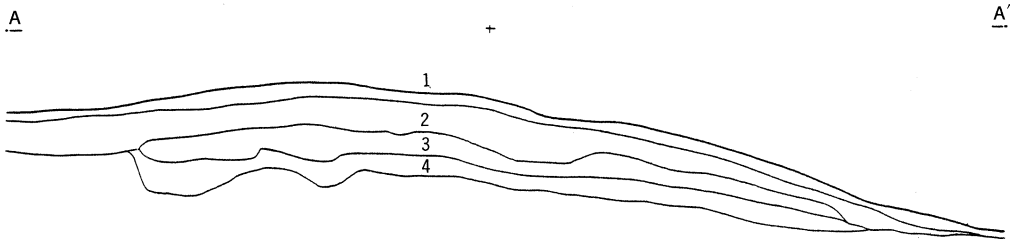




別当十三遺跡　3号塚

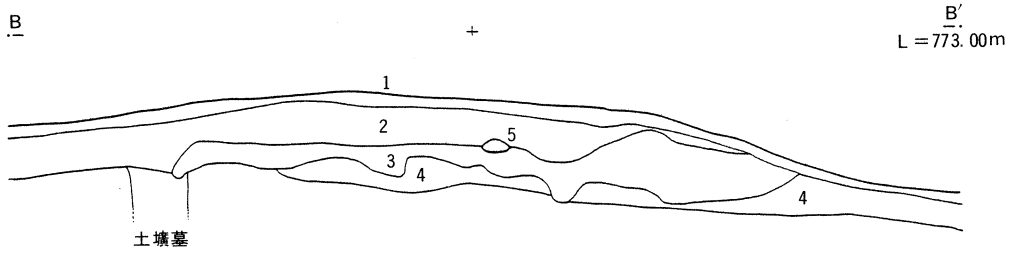
1．表　　土
2．明褐色土層　しまりややあり、粘性ほとんどなし
3．暗褐色土層　しまりあり、粘性あり
4．黒褐色土層　しまり強い、粘性あり

1



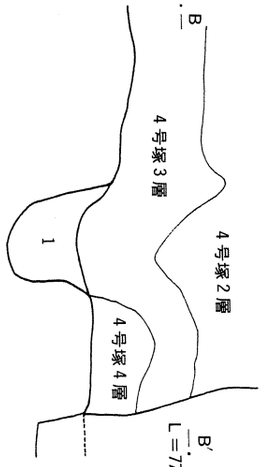
別当十三塚遺跡　4号塚

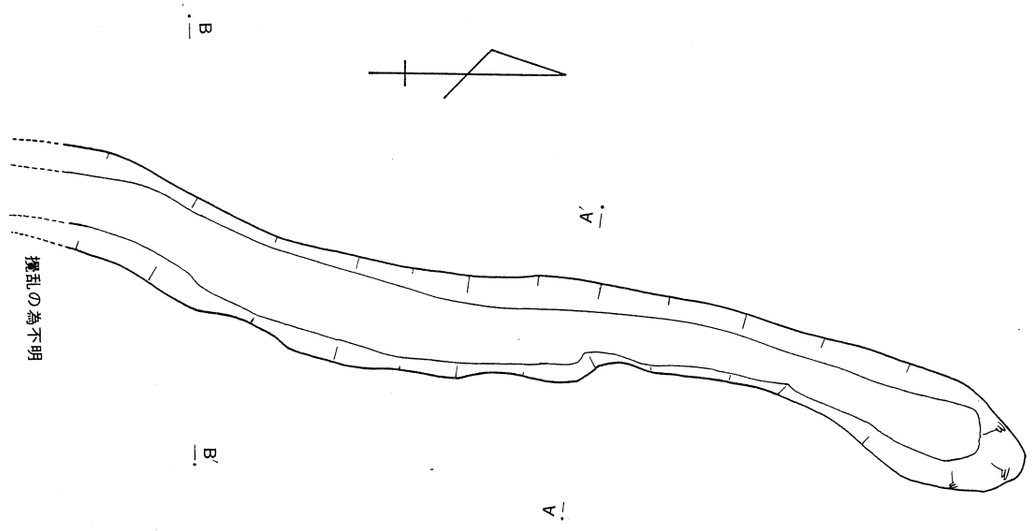
1．表　　土
2．明褐色土層　しまりあり、粘性ほとんどなし
3．黒褐色土層　しまりあり、粘性ややあり
4．明茶褐色土層　しまりややあり、粘性あり
5．焼　　土

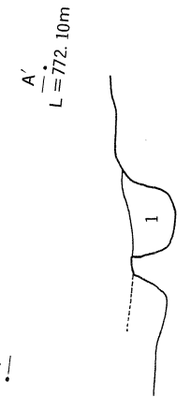


第13図　別当十三塚・第3号塚・第4号塚断面図（1／60）

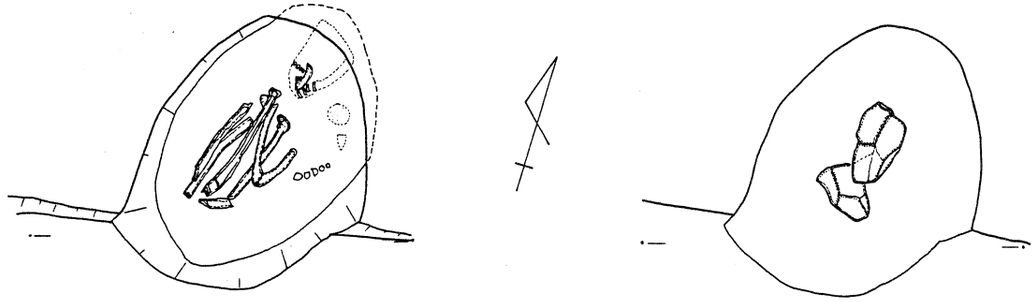
2

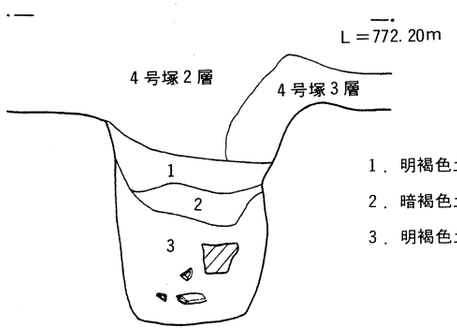






1．黄茶褐色土層　しまりややあり、粘性ややあり





1．明褐色土層　しまりややあり、粘性ほとんどなし、黒色粒子を微量含む
2．暗褐色土層　しまりややあり、粘性ほとんどなし、黒色粒子を微量含む
3．明褐色土層　しまりあり、粘性ややあり、黒色粒子を極微量含む

第14図　別当十三塚遺跡　第４号塚内溝状遺構・１号土壙墓実測図（１／20）

4．第4号塚　（第13図2）

本塚は、今年度調査を行った5基の中で唯一塚に伴う遺構と思れるものが検出されている。東西径約7.5m、南北径約6.9m、高さ約0.7mをそれぞれ計測する。形状は隋円形を呈し、径にくらべて高さがやや低く、偏平な感じである。本塚の盛土は、南北方向が地山の傾斜にそって盛ってあるのに対して、東西方向のうち東側は、どの塚でもみられた明褐色土層がほとんど薄く、また西側は、逆にの層がかなり先までのびており、他の塚とくらべて少々かわっている。

本塚からも、第3号塚同様塚のほぼ中央部付近の地表面下約0.3m程度の所で2ヶ所、範囲にして0.2～0.3m程度のブロック状の焼土が検出されている。また、本塚の地山にあたるローム層を掘りくぼめて、土壙墓と溝状遺構が各1基づつ検出されている。

遺物については、やはり盛土中から陶磁器片と縄文土器の小片がそれぞれ数点づつと、五輪塔の水輪が一点検出されている。

〔土壙墓・溝状遺構〕　（第14図）

本土壙墓は、第4号塚の中心部よりやや西側にはずれた位置より検出された。東西径約65cm、南北径約80cm（現存）・深さ約57cmをそれぞれ計測する。この内部より、直上に人頭大の河原石を2つ置いた状態で、壮年男子1体分の人骨が検出された。頭部を北に向け、西側を向いた右側臥屈葬で掘葬されたものと思われる。骨自体の保存状況は比較的良好であったが、副葬品など遺物は何も検出できなかった。

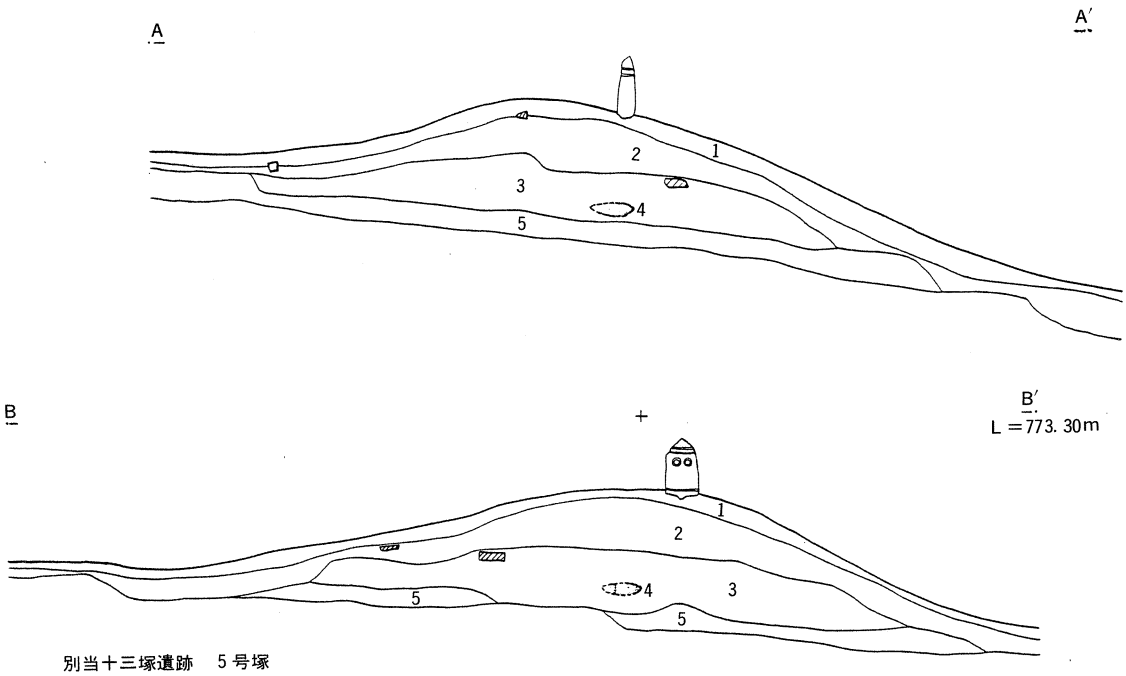
また、溝状遺構は本塚中央部を北から南にかけて検出された。現存長約3m、幅約30cm、深さ約20cmをそれぞれ計測する。ほぼ直線に掘られており、断面はU字状を呈し、履土は一層であった。本遺構の南側は、塚自体の調査時に掘りすぎてしまい不明であるが、北側についてはその先端が検出されている。本遺構からは遺物はなにも検出できなかった。

5．第5号塚　（第15図）

本塚は、本十三塚群の中で、最も保存状態が良好であり、規模も最大のものである。東西径約7m、南北径約6.4m、高さ約1.1m、をそれぞれ計測する。形状は隋円形を呈し、裾部もわかりやすく、独立した塚を形成している。盛土もしっかりしており、周囲の土を盛り上げたであろう形跡が確認できた。

本塚からも、付属遺構と思われるものは何も検出されなかったが、第3・4号塚同様、塚のほぼ中央部、表土から約70cm程度の所から焼土と若干の炭化物が、約30cmの範囲で検出された。

遺物としては、盛土中より陶器片が数点検出されたほか、塚上部より板碑が一体検出されて



別当十三塚遺跡　5号塚
1．表　　土
2．明褐色土層　しまりややあり、粘性ほとんどなし
3．黒褐色土層　しまり強い、粘性ややあり
4．焼　　土
5．茶褐色土層　しまりややあり、粘性ややあり

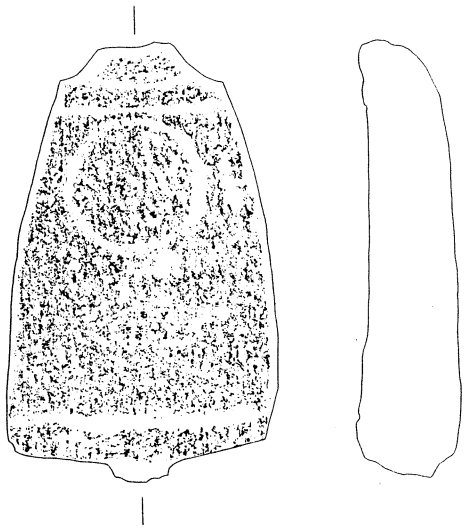
第15図　別当十三塚・第5号塚断面図（1／60）

いる。

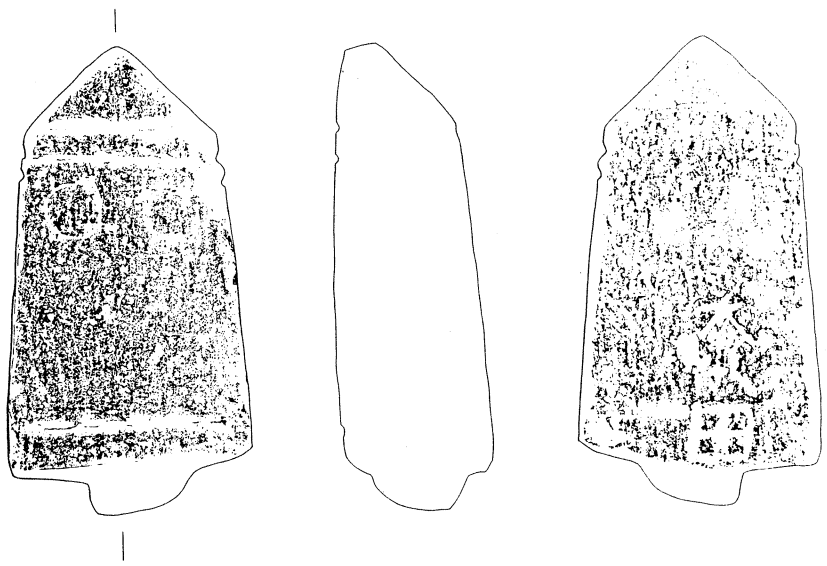
第2節　出土遺物

1．土器・陶磁器

本十三塚のうち、第2号、第4号、第5号の三基の塚の盛土中より陶磁器片と縄文土器片があわせて20点近く出土している。このうち、第4号塚より中国製の青磁小片と思われるものがあったほかは、検出された陶器のすべてが室町時代後期頃の伊賀・信楽系の雑器片であったことは注意すべき事であろう。しかし、出土遺物全て小破片であり図示できるものはなかった。



1



2

第16図　別当十三塚遺跡　第３号塚及び第５号塚上板碑実測図（１／８）

2．石造物

〔板　碑〕　（第16図）

同図１は、第３号塚上にあった板碑で、石材は輝石安山岩が用いられている様である。全体的にやや薄めで、前方向に反っている。頭部の先端と根部の一部を欠損しているがほぼ完形である。頭部は両脇から抉りが入っており、その直下の正面部分に二条線が入る。さらにその下に円形の浅い掘りこみがある。梵字等を刻んだものと思われるが、風化の為かあるいは初めから何もなかったのか、文字等を続みとることはできなかった。

同図２は、第５号塚上にあった板碑で、石材は輝石安山岩が用いられており、前出のものより厚めである。頭部先端と根部が一部欠損しているがほぼ完形である。正面上部に二条線をもち、その直下に日月かあるいは梵字を刻んだと思われる小円が２つ左右に配してある。ただ、１と同様文字等は続めない。また、側面にも二条線が刻んであるが、正面の線より一本分下へずれている上、刻みも深くはっきり刻まれていることから、後世に改刻された可能性が強い。また、裏面下部ほぼ中央に同地区の地名である「大八田」の文字がややくずれた感じではあるが刻まれている。これも、側面同様刻みが新しそうな所もあり、後世の改刻の可能性があるものの、大変興味深い資料といえよう。

〔五輪塔〕　（第17図）

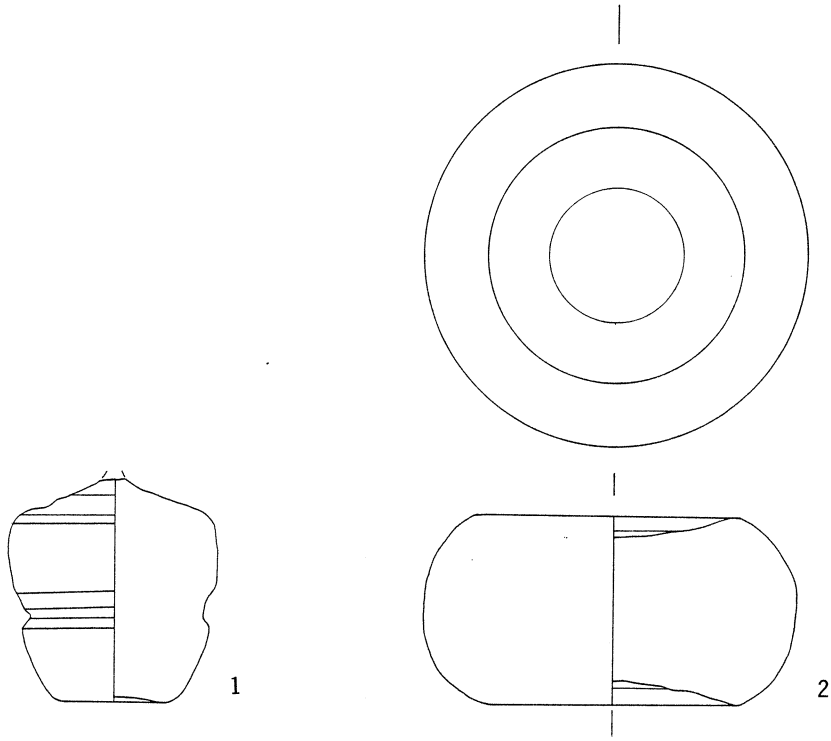
同図１は第３号塚上にあった一石造りの空風輪で安山岩系の石材を用いている。頂部が欠損している以外はほぼ完形であるが、梵字等は刻まれてはいない様である。

同図２は第４号塚中央部やや北西寄りの地点、地表面下約15㎝の所から検出された水輪と思われる。こちらも安山岩系の石材を用いており完形である。しかし、１同様梵字等は何も刻まれていない様である。

第３節　小　　結

本十三塚の調査を行っての留意点や、問題点などを以下に上げて、小結としたい。

本十三塚は、塚の周囲の土をローム層までが、若干ローム層をけずってそれらの土をかき上げると共に、不足分は別の場所から土を持ってきて築造されたと思われる。また、地形が南東方向にゆるやかに傾斜しており、その為比較的同方向に盛土が厚く、塚自体の傾斜も顕著である。但し、第３号と第５号塚は他の３基にくらべて、しっかり構築されており、かならずしもこのかぎりではない様である。



第17図　別当十三塚遺跡五輪塔実測図（１／４）

本十三塚の造成年代については、出土した陶器片の年代が室町時代後期（16世紀前後）であることから、同時代かそれ以後のものであると思われる。

また、第４号塚内より検出された土壙墓と溝状遺構については、両方とも塚の造成時かそれ以前に築造されたものであろうこと以外ははっきりしない。これらは、本塚に伴う遺構の可能性が高いものの、遺物などの本塚との関係を裏づけるものが何も出土していない為、一概には判断できないからである。但し、本塚からは五輪塔の一部が検出されており、土壙墓と本塚の関係を判断する材料の一つとなるかもしれないが、現時点では具体的なことは不明である。

また、本塚より検出された五輪塔や板碑については、第４号塚より出土したものをのぞけばいずれも原位置とは言えず（特に板碑については発見当初は塚の下にあったものもあった。）さらにこれらの遺物自体の製作年代を決定するだけの決め手がなく、本十三塚との具体的な関係について、はっきりしたことはわからない、また五輪塔の空風輪と水輪の関係についても、比較的似ているが、他の部分がみつかっておらず、同一のものかどうかも判断しかねる。

本十三塚を調査して、第４号塚の土壙墓等貴重な発見が多かったものの、具体的にそれらの関係をさぐる方法がみつからず、また十三塚自体の性格を判断できる様な遺物等も検出されず、根本的には何もはっきりしないも同じである。来年度に行なわれる残りの調査において、これらの不明点を解明できる様な資料が検出できることを期待する。　（小田澤　佳之）

第Ⅳ章　別当遺跡（第２次調査）

第１節　検出された遺構

１，第１号敷石住居址（第19～21図）

本址は、調査区の北西部に位置し主軸を北西にとっている。長径が約9.6m、短径が約8mである。検出面が黒色土中のため、重機による表土剝ぎの際、敷石の一部が、移動した可能性がある。従って遺存状態は不良であるが、原型は柄鏡型を呈していたものと思われる。この様な事情から、覆土は全く残存せず、遺物も炉体土器の深鉢以外は皆無である。

炉は、住居址のほぼ中央に位置している石囲い炉である。

敷石の下には浅い掘り方があり、掘り方面には土坑が１基存在した。

２，第２号敷石住居址（第22～24図）

本址は、調査区の西端部に位置している。１号と同じく、検出面が黒色土中のため、重機によって一部の敷石が移動している可能性があるものの全体の遺存状況は１号よりは良好である。

炉は住居址の北側ほぼ中央に位置する石囲い炉であり、炉体土器の深鉢が出土した。

１号と同じく浅い掘り方が検出され、土坑が１基検出されている。

３，土　　坑（第25・26図）

本遺跡では４基の土坑が、検出されている。１～３号土坑はいずれも、経２～３mの不整円型を呈している。

第４号土壙は、径1.5mの不整円形で内部から人骨一体分が検出された。人骨の遺存状態は極めて不良で、原形を保ったまま取り上げることは不可能で鑑定も不可能であったため無縁仏として埋葬した。

第２節　出土遺物

１，第１号敷石住居址（第27図）

本址では炉内から口唇部を一部欠失したほぼ完形の深鉢が出土した。土器自体は火を受けてかなり脆くなっていて、内面も頸部を中心にかなり剝落している。器高21.8cm、底径7.0cm、口径36.0cmで、最大径は口縁部にある。器形は胴部がややつぶれた球形を呈し頸部から大きく外反して多少立ち上がった口縁に至っている。

胴部は、粘土紐で縦に三つに区画し縄文を地文にして沈線によって重弧文、円等を描いている。頸部には、粘土紐を二本張り付けて棒状工具で押捺を繰り替えして更にその二本の粘土紐につまみ出した様なブリッジを6ヶ所張り付けてある。

以上の様な様相からこの土器は堀之内Ⅰ式に比定されるものと思われる。

2，第2号敷石住居址（第28図）

本址の炉からも炉体土器が出土している。この土器は小型の深鉢型土器で、頸部以上を欠失している。現存器高14.5cm、底径6.5cmで、最大径は口縁部にあると思われる。器型はほぼ直立した胴部に若干括れた頸部から弱く外反して口縁に続くものと思われる。

文様は粘土紐を縦に張り付けて胴部を三つに区画し、沈線文を描いた後縄文によって空白を充塡している。

頸部には2本の粘土紐を張り付けその上を縄文の原体でよって押捺を繰り替えしている。更に6ヶ所に2本の粘土紐を跨いでブリッジを張り付けている。

以上の様な特徴からこの土器も堀之内Ⅰ式に比定されるものと思われる。（櫻井真貴）

第Ⅴ章　糀屋敷遺跡

第1節　検出された遺構

1，住居址（第30・31図）

本遺跡では、住居址は1軒検出されていてローム層を掘りこんで構築されている。調査区の北半に位置している。平面形は径約5mの不整円形をしているものの、ほとんど削平されていて、炉や周溝の一部、ピットなどが残されているのみである。したがって、出土遺物もほとんどなく、図示できる様な物は無かった。

炉は石囲い炉で、四方に石を五つほど配した方形のものである。

床面は比較的堅致であった。

2，1号溝状遺構（第32図）

本址は調査区の北半をほぼ南北に走り、調査区を東西に分割している。全長約40ｍ、幅約２ｍである。遺物は溝のほぼ中央から茶臼の下半の部分が完形で出土した。

2号溝状遺構（第33図）

本址は１号溝と並行して調査区を南北に走っているものの全長は１号溝の約１／３程の長さで比較するとかなり短い。

遺物は特に出土していない。

3．屋外炉（第34～37図）

本遺跡では８つの炉址が検出されている。そのいずれも、周囲に柱穴等の付属施設を持たず単独で検出されている。よってここでは、この炉址を住居址内の炉址とは考えずに屋外炉と考える。

その屋外炉の内３号、７号、８号からは炉体土器が検出されている。その他のものは、掘り込みに焼土が伴っているものである。

各炉址ともに、土器以外の遺物は検出されていない。

4，土　　坑（第38～44図）

土坑は調査区全体に25基検出されている。検出状況に特に規則性は無く全体に散漫に散らばっている。

第２節　出土遺物

1，1号溝状遺構（第45図）

本址からは茶臼の下半の部分が完形で出土している。直径42.9cm・底径40cm・器高11.9cmを計る。

2，3号屋外炉（第46図）

ここでは、粗製の深鉢の胴中位から下の部分が出土している。底径は10cm・現存器高15cmを測る。底部には網代痕が残っている。

3，7号屋外炉（第47図）

ここでは、3つの土器が出土している。

1は、深鉢の胴下半以下で、2本組みの沈線によって文様が描かれている。底径は7.4cm・現存器高は10.6cmである。

2は、同じく深鉢であるが、胴中位のみ残存している。文様はおそらく1本を単位とした沈線によって描かれていて、底部には網代痕が残っているがかなり摩滅している。

3は、粗製の深鉢の胴下半以下である。文様は施されておらず、無文である。底径は12.8cm・現存器高12.4cmを測り、底部には網代痕が残されている。

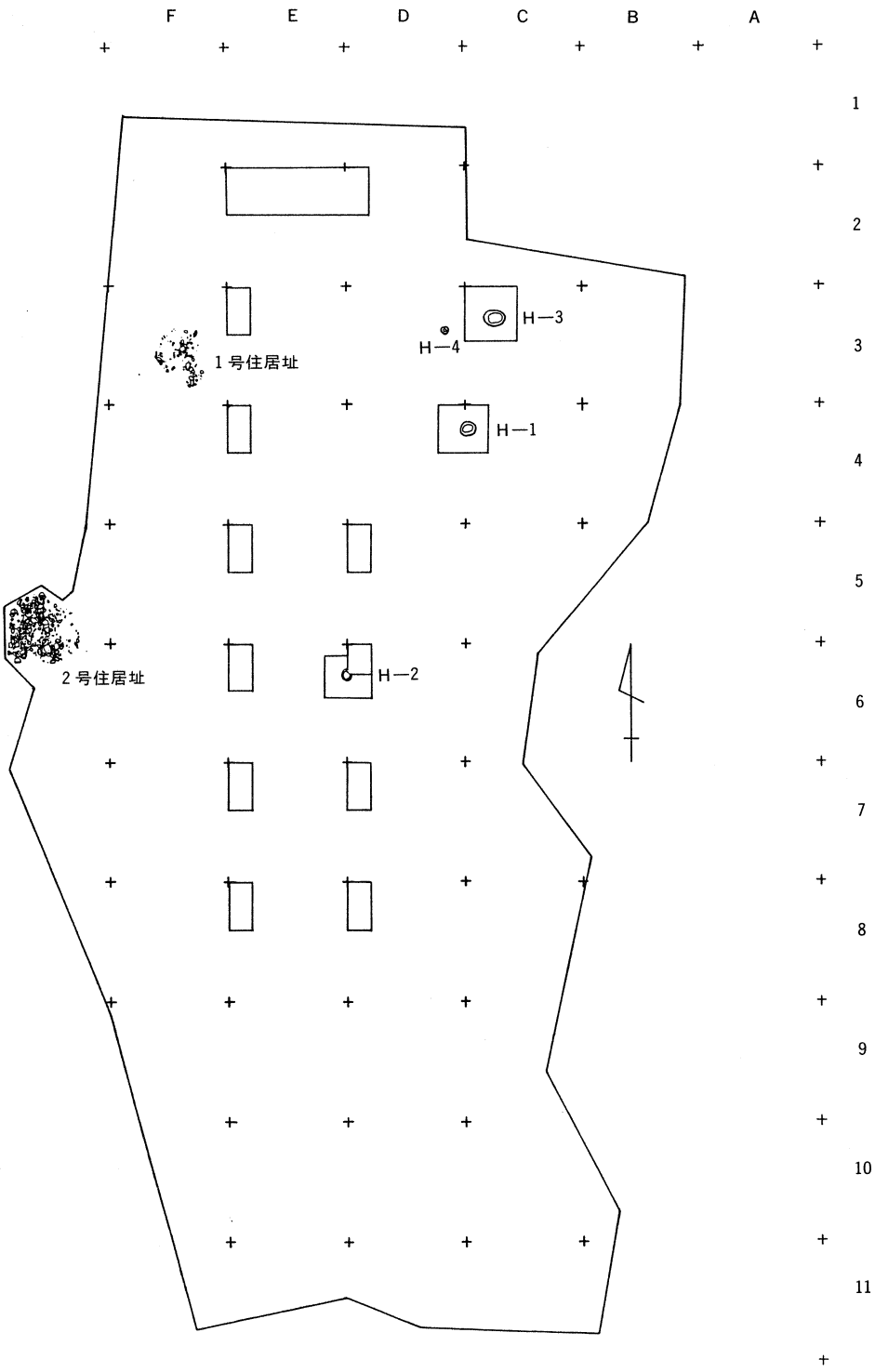
4，8号屋外炉（第48図）

1は、底部と口縁部を欠いた深鉢型土器である。文様は縄文を地文にしてその上に3本から4本の単位の沈線を垂直方向と斜め方向に繰り替えして施している。現存器高は17.3cmで、最大径は口縁部にあると思われる。

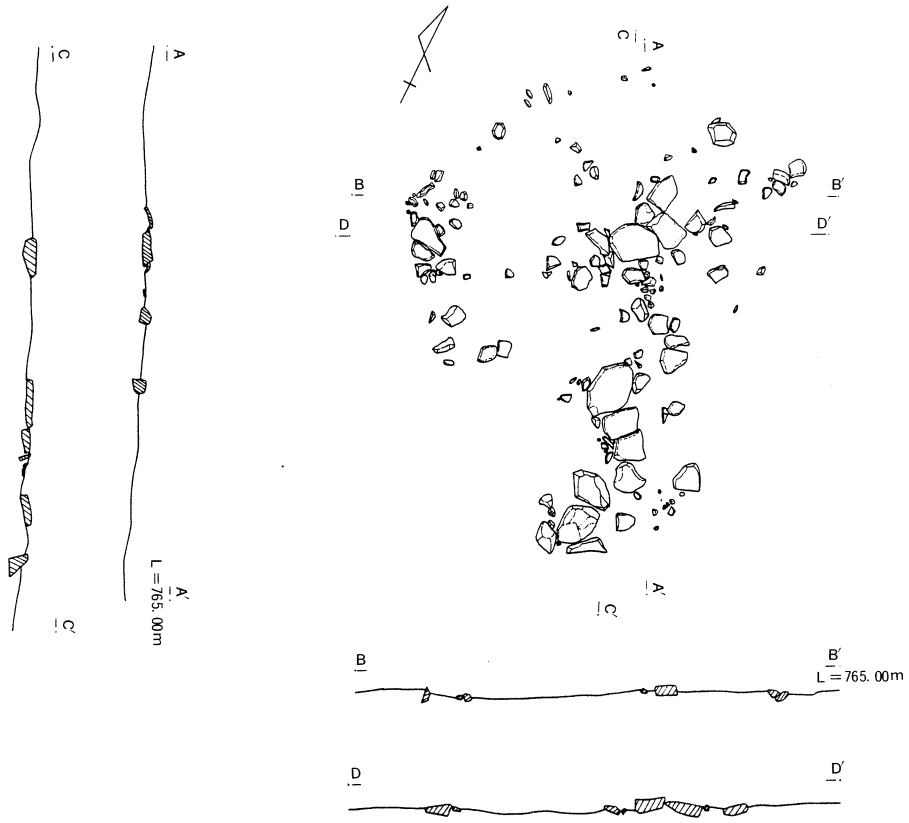
2は、無文の深鉢型土器の胴中位から下の部分である。底径は7cm・現存器高は21.2cmを測る。底部には網代痕が残されているが、摩滅が激しく判然としない。

本遺跡から出土した土器はいずれも縄文時代後期前半、堀之内Ⅰ式の範ちゅうに納まるものと思われる。

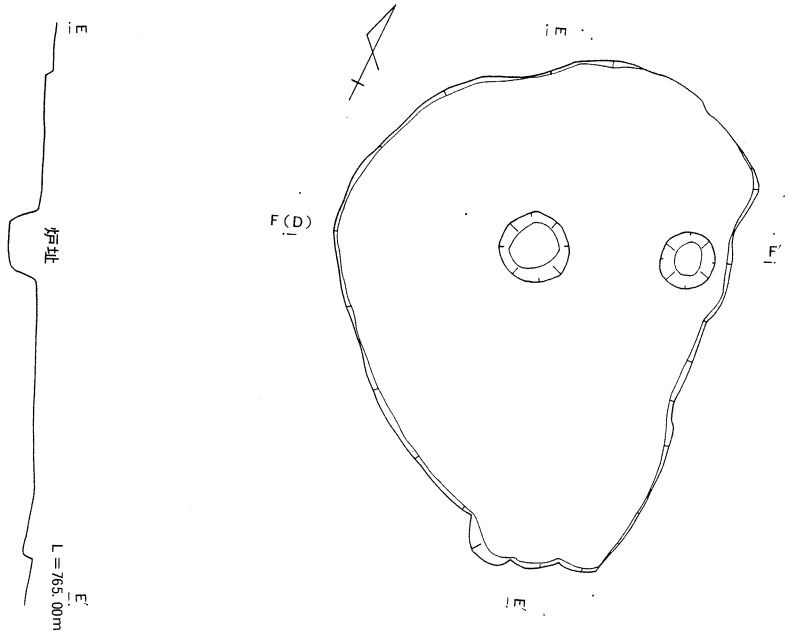
（櫻井真貴）



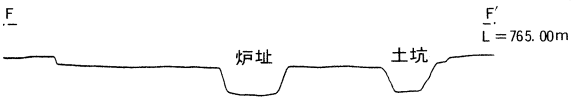
第18図　別当遺跡遺構配置図（1／600）

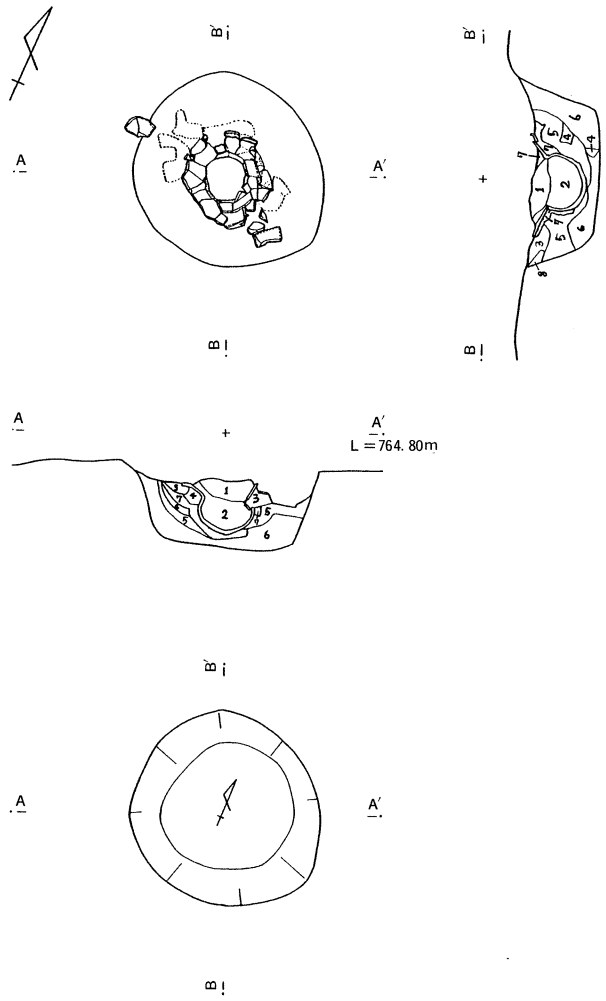


第19図　別当遺跡　第１号住居址敷石配置図（１／80）



第20図　別当遺跡
第１号住居址掘り方実測図
（１／80）



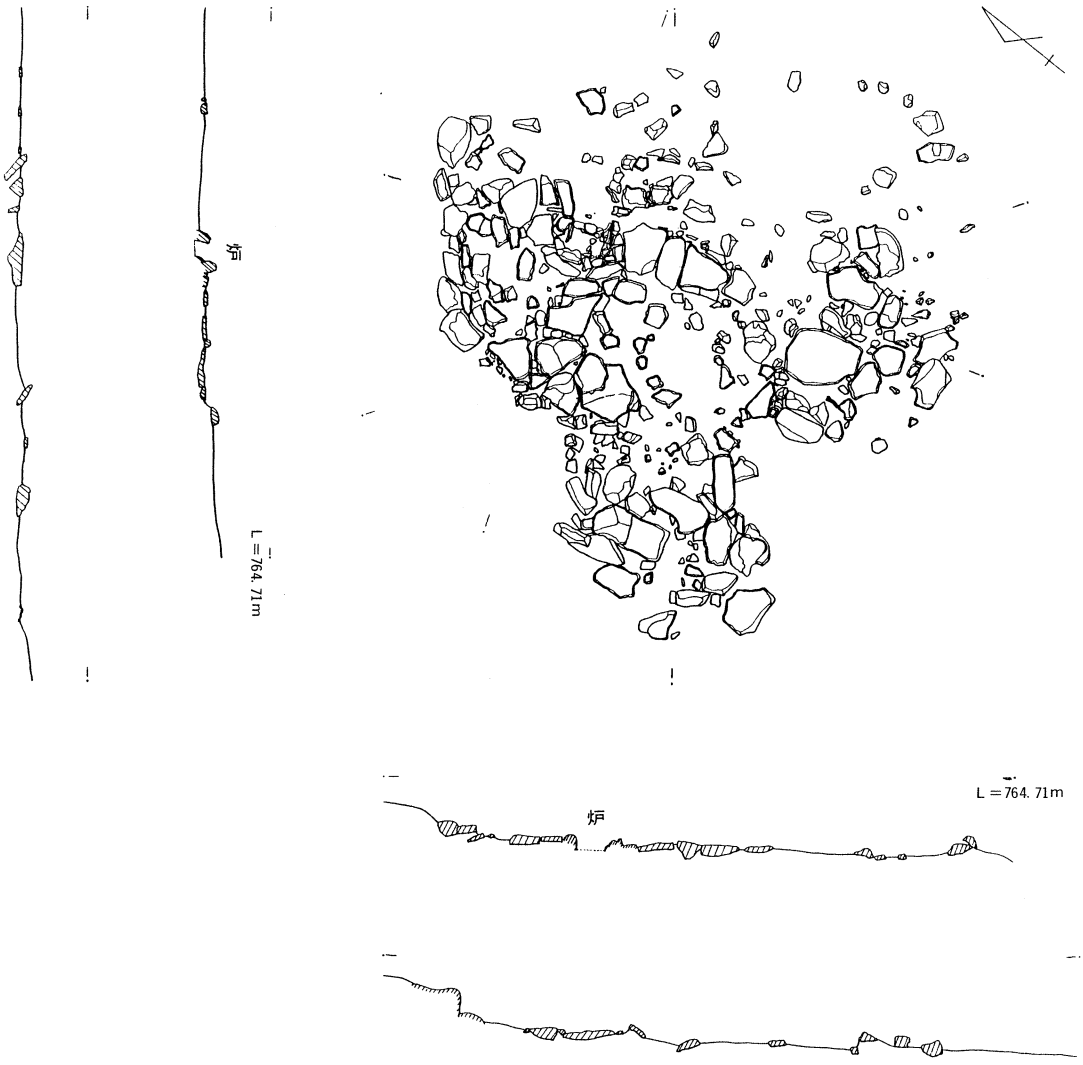


別当一号　敷石住居跡

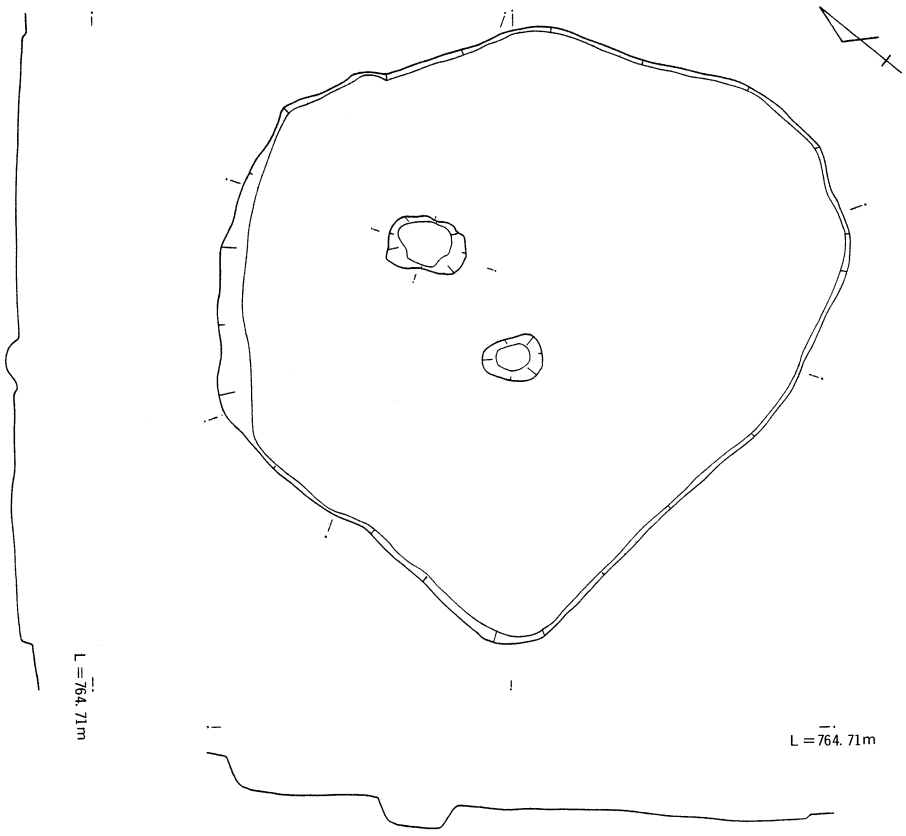
炉

1．黒 色 土 層　粘性有り、締りも有り、焼土粒子を微量含む、炭を多く含む。
2．暗褐色土層　粘性有り、締りやや有り、微量の焼土粒子と炭をブロック状に含む。
3．黒 色 土 層　粘性有り、締りやや有り(1層に近い)微量の炭を含む。
4．黒 色 土 層　粘性ほとんど無し、締り有り、炭を微量含む、焼土ブロック及び粒子を多量に含む。
5．暗褐色土層　粘性ややあり(4より弱い)、締り有り、焼土ブロック及粒子を少量含む。
6．暗褐色土層　粘性ほとんど無し(4より強い)、締りやや有り、焼土粒子を微量含む。
7．焼　　土
8．灰白褐色土層　締り余り無し粘性ほとんど無し。

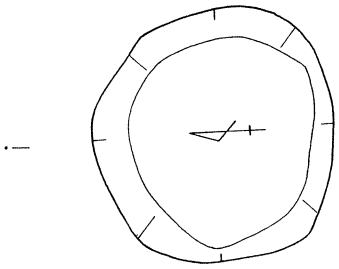
第21図　別当遺跡　第１号住居址炉実測図（１／30）



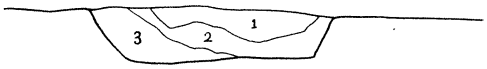
第22図　別当遺跡　第２号住居址敷石配置図（１／80）



第23図　別当遺跡　第２号住居址掘り方実測図（１／80）

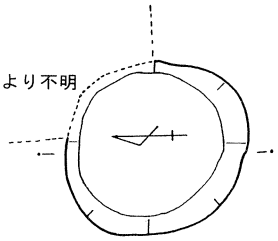


H—1



H—1 別当遺跡(2次)土坑セクション図

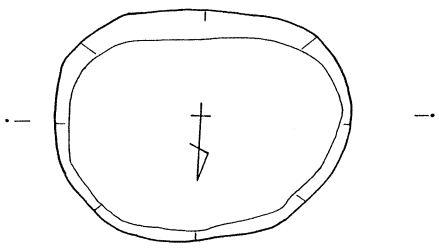
1．黒色土層　粘性とても強く締り多少弱い
　2㎝位の小石若干混入
2．暗褐色、黒色土と褐色土がまじった層一
　部に炭化物、粘性強く締りも強い。
3．黒褐色土　2層よりも褐色土の混入が少
　ない炭化物が少量混入、粘性強く締りとて
　も強い。



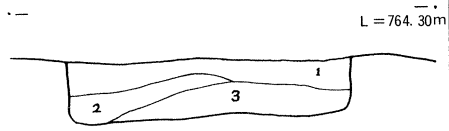
H—2

H—2 別当遺跡(2次)土坑セクション図

1．黒褐色土層　若干炭化物を含む、淡黄褐色の焼土の
　ような粒子を極めて微量含む、粘性締り共に弱い。
2．淡黄褐色土　焼土のような物が全体になっている、
　若干黒色土が混入している、粘性なく締り強い。
3．黒色土層　若干焼土のような土が混入しているが1
　層よりも少ない、粘性弱く締りやや強い。



H—3

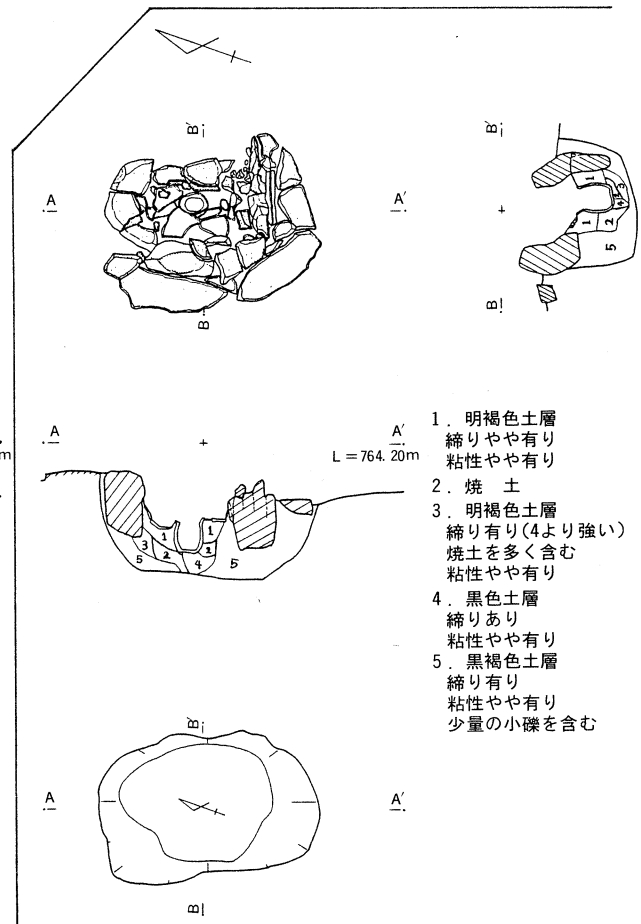


H—3 別当遺跡土坑土層断面図

1層　褐色土層
　粘性無くしまりも弱い砂質の層
2層　黒褐色土層
　黒色土が多量にソフトロームが極めて
　少量混入、締り弱く粘性多少有り
3層　褐色土層
　部分的にソフトロームが多く混入粘性
　なくしまり弱い砂質の層

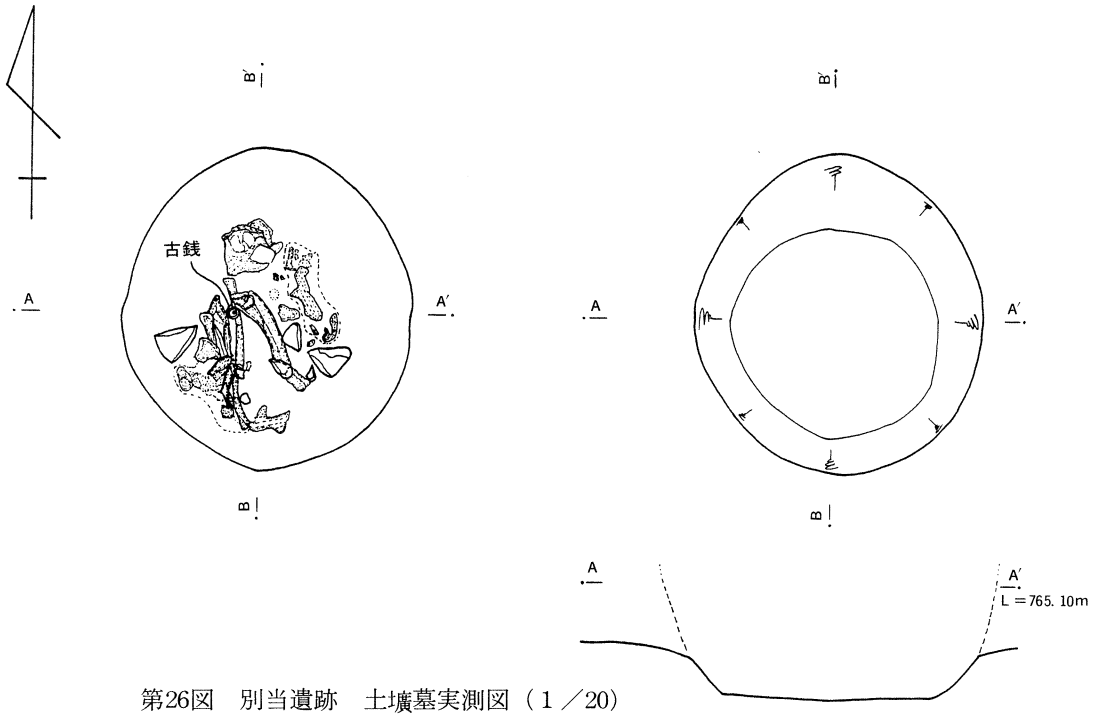
第25図　別当遺跡

第1・2・3号土坑実測図（1／40）

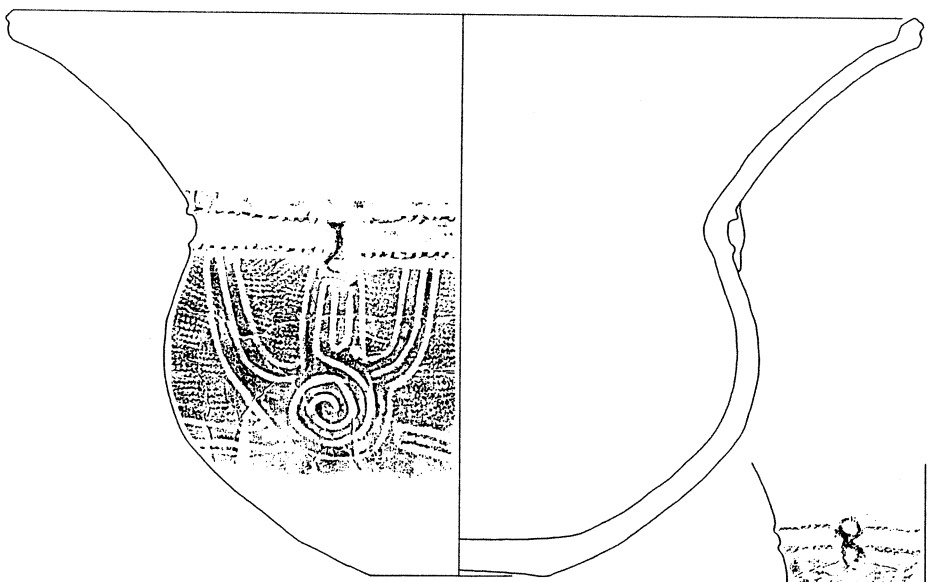


1．明褐色土層
　締りやや有り
　粘性やや有り
2．焼　土
3．明褐色土層
　締り有り(4より強い)
　焼土を多く含む
　粘性やや有り
4．黒色土層
　締りあり
　粘性やや有り
5．黒褐色土層
　締り有り
　粘性やや有り
　少量の小礫を含む

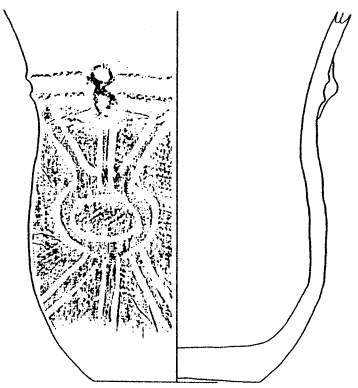
第24図　別当遺跡　第2号住居址炉実測図（1／30）



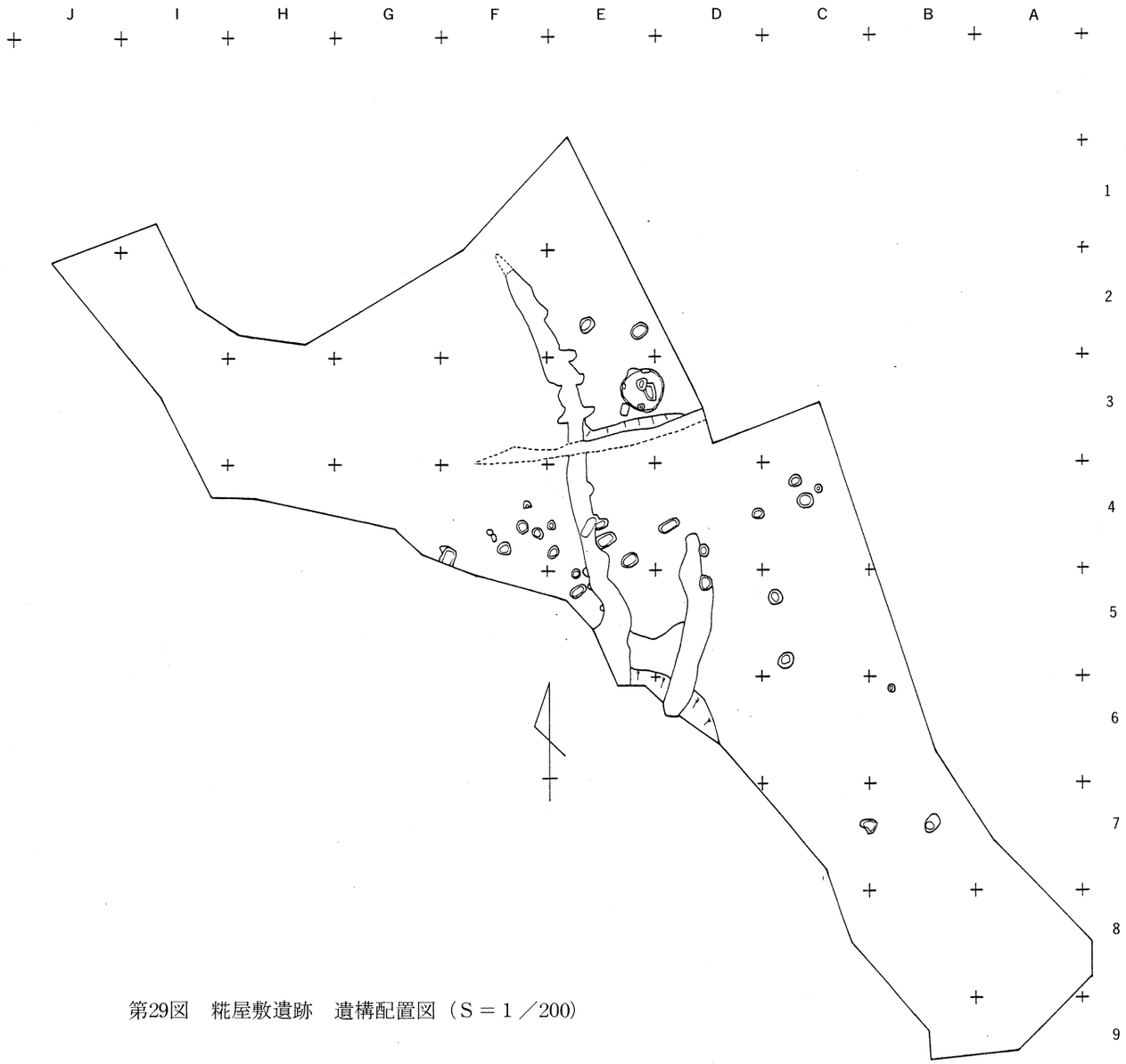
第26図　別当遺跡　土壙墓実測図（１／20）



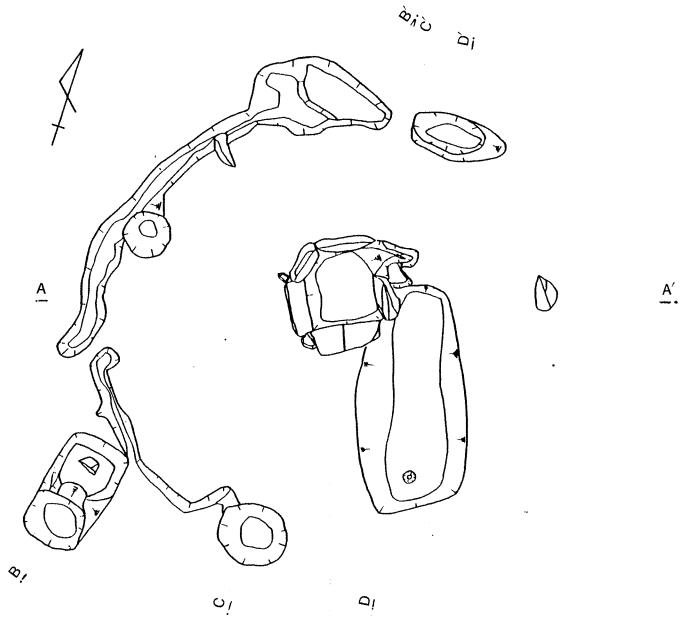
第27図　別当遺跡第１号住居址(1／3)

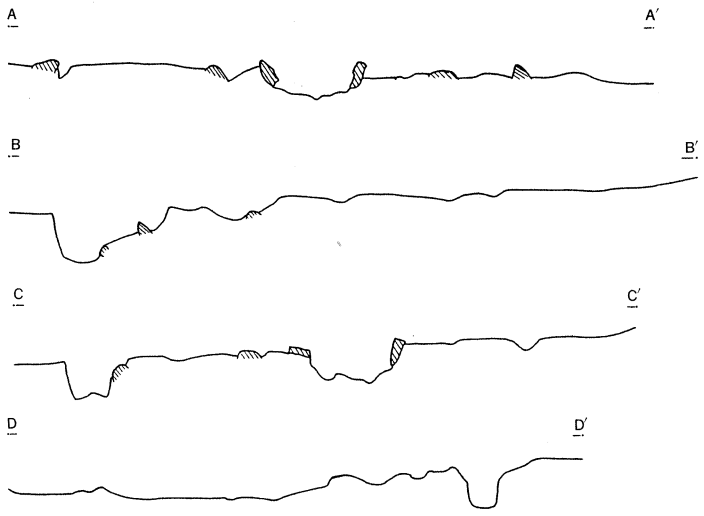


第28図　別当遺跡第２号住居址(1／3)

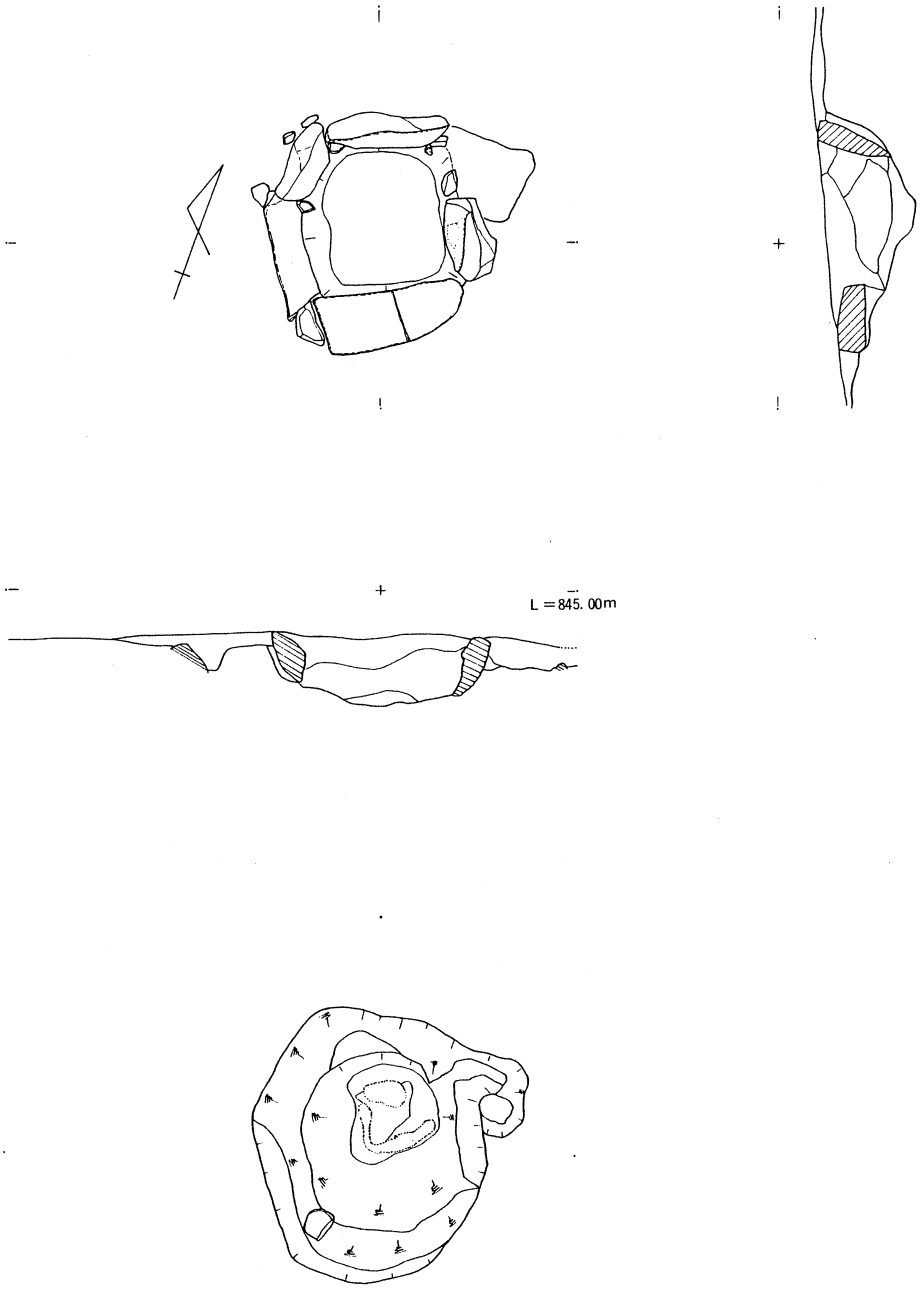


第29図　糀屋敷遺跡　遺構配置図（S＝1／200）

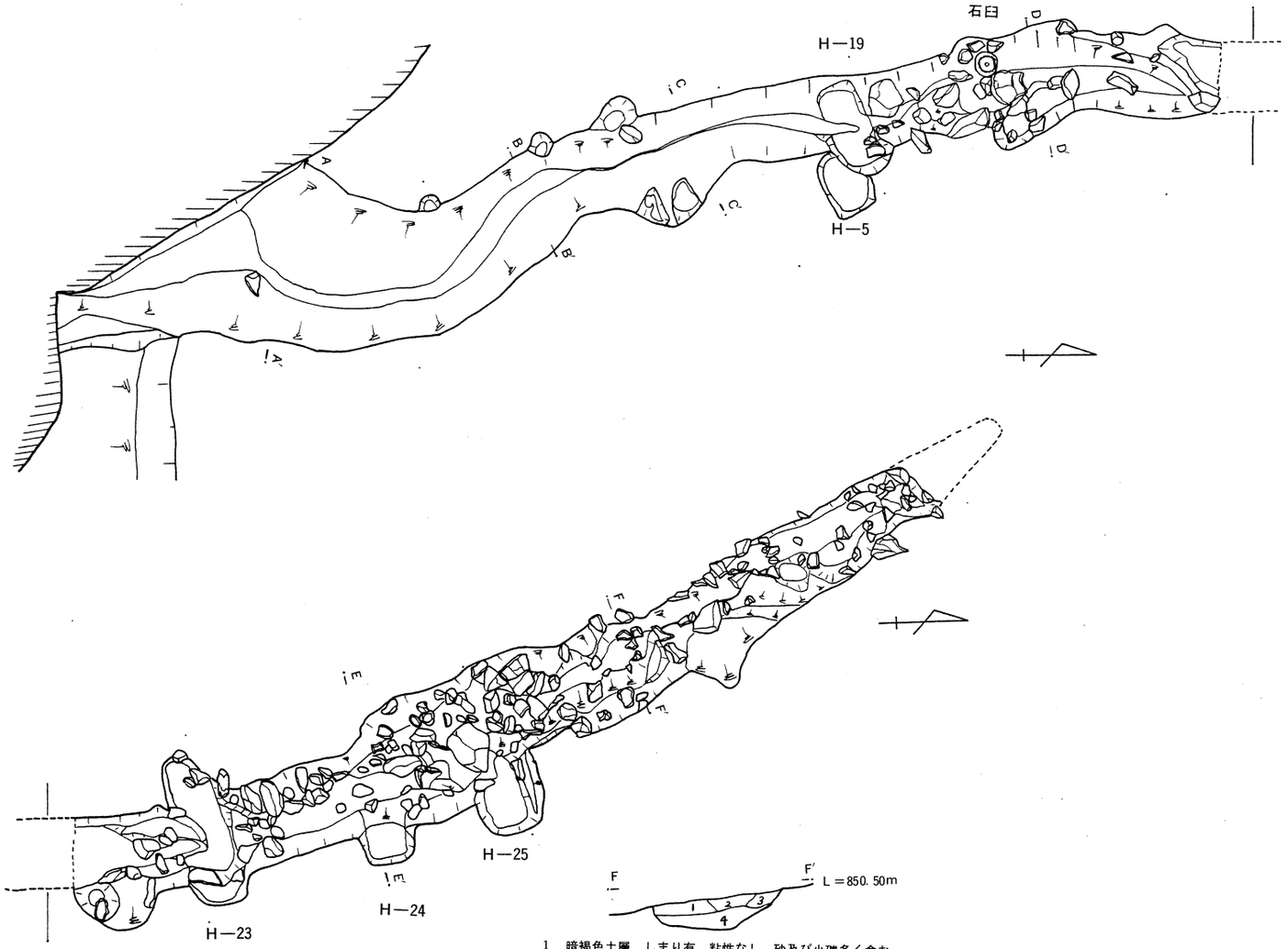




第30図　糀屋敷遺跡　第１号住居址（S＝１／60）

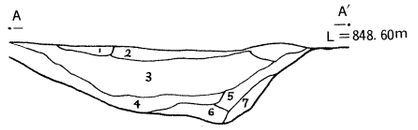


第31図　糀屋敷遺跡　第１号住居址炉址実測図（Ｓ＝１／30）

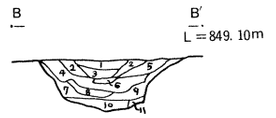


1．暗褐色土層　しまり有、粘性なし、砂及び小礫多く含む。
2．茶褐色土層　しまりやや有、粘性なし、小礫を少量含む。
3．明褐色土層　しまりやや有、粘性なし、ローム粒子微量含む、小礫少量含む。
4．灰褐色土層　しまり強い、粘性なし、砂利と礫で形成される。

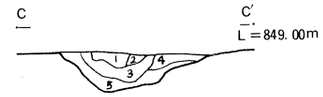
第32図　糀屋敷遺跡　第１号溝状遺構実測図（S＝１／120）



1．明褐色土層　しまり強い、粘性なし、ロームブロックと小礫多く含む。
2．暗褐色土層　しまり強い、粘性なし、ローム粒子少量含む。
3．黒色土層　しまり・粘性強い、小石とローム粒微量含む。
4．黒褐色土層　しまりやや強い、粘性強い、ローム粒少量含む。
5．明褐色土層　しまりやや強い、粘性有、ローム粒少量含む。
6．黒褐色土層　しまり・粘性強い、ローム粒子多く含む。
7．褐色土層　しまりやや強い、粘性有、ローム粒子多く含む。

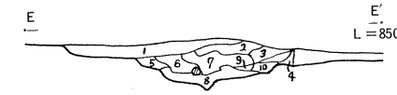


1．黒色土層　しまり有、粘性やや有、小礫少量含む。
2．暗褐色土層　しまり・粘性やや有、小礫若干含む。
3．暗褐色土層　しまりやや有、粘性有、炭化物少量混入。
4．黒褐色土層　しまりやや強い、粘性強い、ローム粒子少量含む。
5．明褐色土層　しまりやや強い、粘性なし、砂多く含む。炭化物少量混入。
6．砂層　しまり・粘性なし、小礫少量含む。
7．明褐色土層　しまり・粘性やや有、ローム粒多量に含む。
8．明褐色土層　しまり・粘性やや有、小ロームブロック少量含む。
9．暗褐色土層　しまり・粘性有、ローム粒少量含む。
10．砂利層　しまり有、粘性なし、砂と小礫多く含む。
11．明褐色土層　しまり・粘性ほとんどなし、砂多く含む。

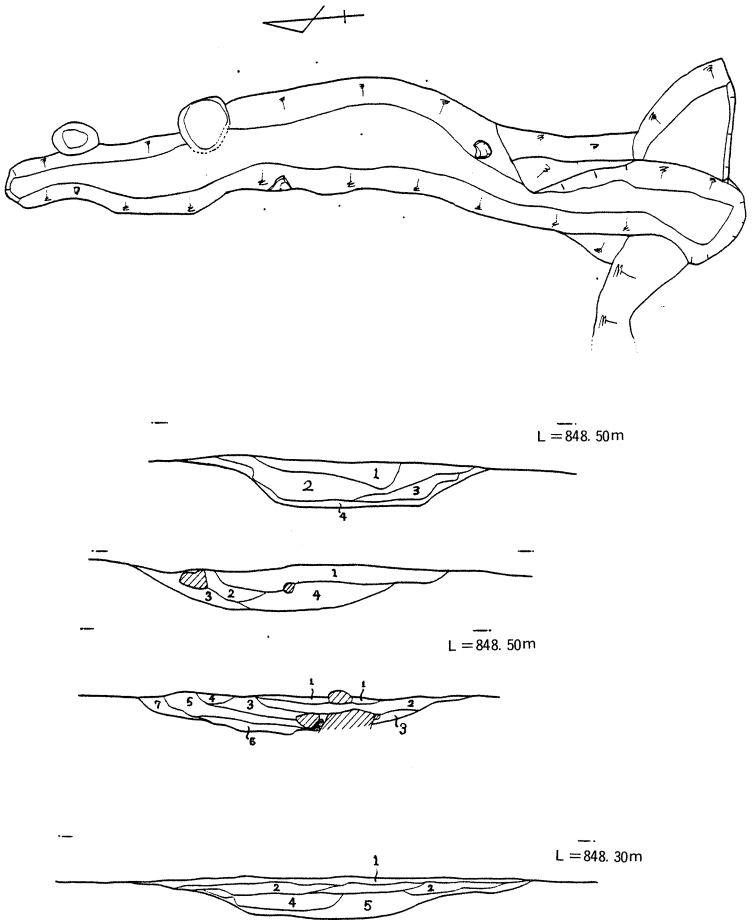


1．黒色土層　しまり有、粘性やや有、
2．明褐色土層　しまりやや強い、粘性なし、小礫少量含む。
3．暗褐色土層　しまり・粘性強、ローム粒子微量含む。
4．明褐色土層（２層より明るい）　しまりやや強い、粘性なし、小礫多く含む。
5．明褐色土層　しまりやや強い、粘性有。

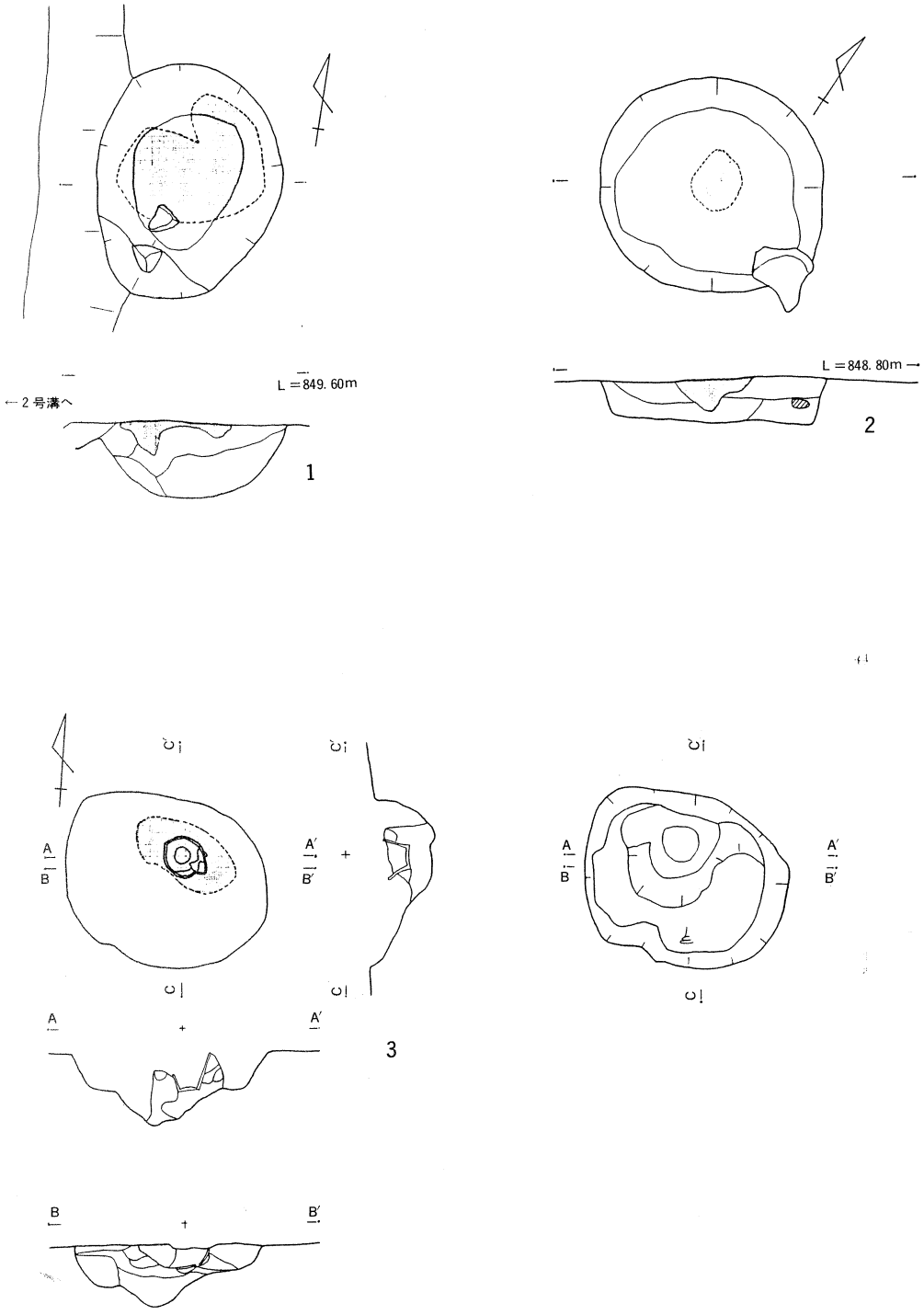
1．明褐色土層　しまり・粘性強い、ロームブロック及び粒子多く含む。
2．茶褐色土層　しまり・粘性強い、ローム粒子少量含む。
3．黒色土層　しまり・粘性強い、ローム粒子微量含む。
4．暗褐色土層　しまり・粘性やや有、赤色粒子少量含む。
5．明褐色砂利層　しまりやや有、粘性なし、砂と小礫多く含む。
6．暗褐色土層(1層よりやや明るい）しまり･粘性強、ローム粒子微量含む。
7．黒褐色土層　しまり有、粘性やや強い、砂少量含む。
8．暗褐色砂利層　しまり有、粘性なし、礫多く含む。
9．炭褐色土層　しまり有、粘性やや有、砂多く含む。



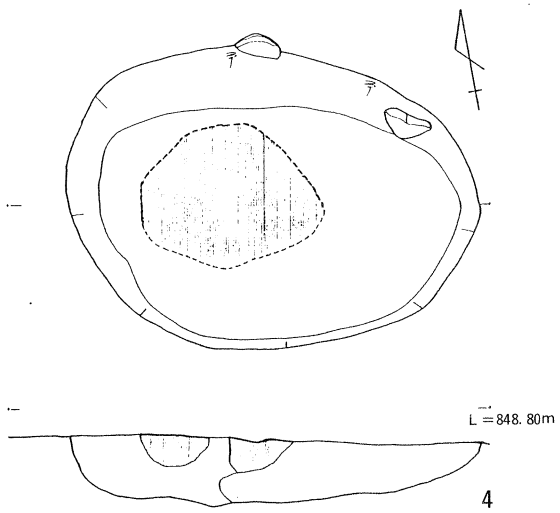
1．暗褐色土層　しまり強、粘性やや有、ローム粒子と小礫含む。
2．黒褐色土層　しまりやや強(1層より弱)、粘性やや有、ローム粒子微量含む。
3．暗褐色土層(1層よりやや明るい）しまり･粘性有、ローム粒子微量含む。
4．明褐色土層　しまり・粘性やや強い、ローム粒子少量含む。
5．明褐色土層　しまりやや強い、粘性なし、ローム粒子微量含む、小礫少量含む。
6．褐色土層　しまりやや強い、粘性有、小礫少量含む。
7．黒色土層　しまり有、粘性強い、ローム粒子微量含む。
8．砂利層　しまりやや有、粘性なし、下層に小礫若干含む。
9．明褐色土層　しまり・粘性やや強、ローム粒子少量含む、砂多く含む。
10．灰褐色土層　しまり強い、粘性なし、砂多く含む。

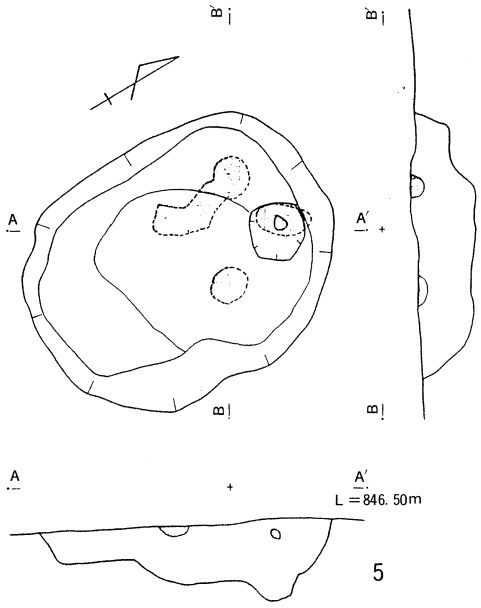


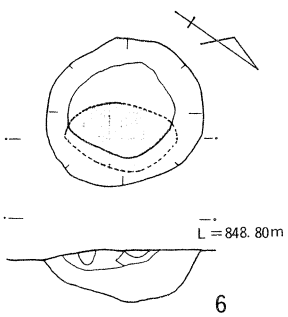
第33図　糀屋敷遺跡　第２号溝状遺構実測図（Ｓ＝１／120）



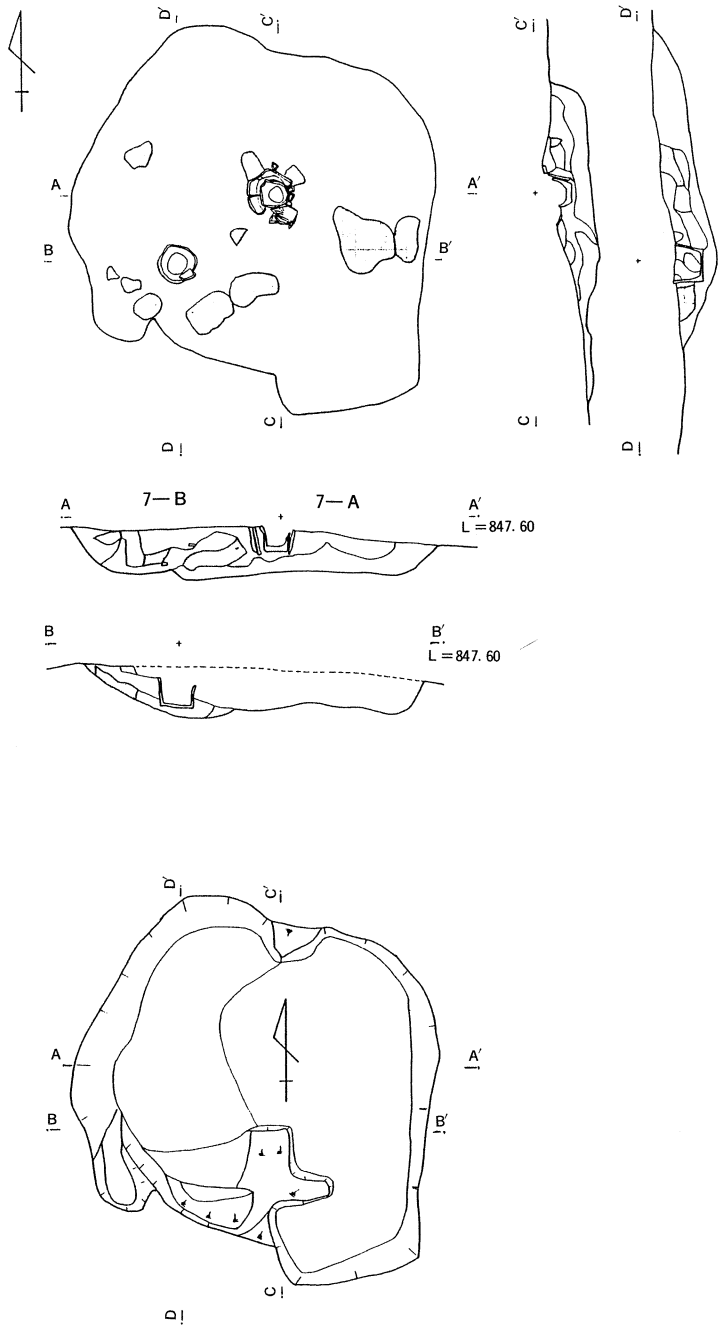
第34図　糀屋敷遺跡　第1・2・3号炉址実測図（S＝1／30）



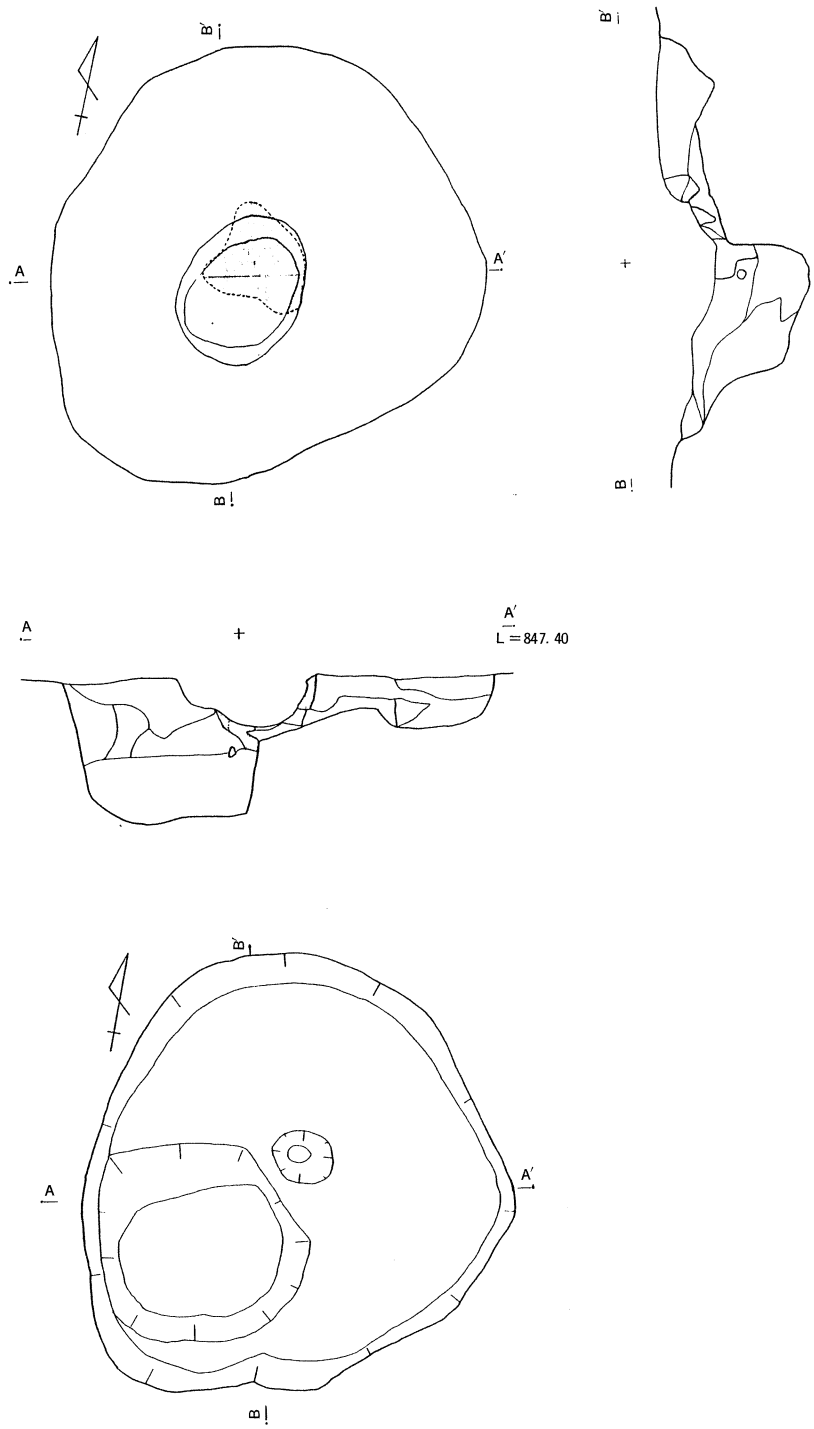




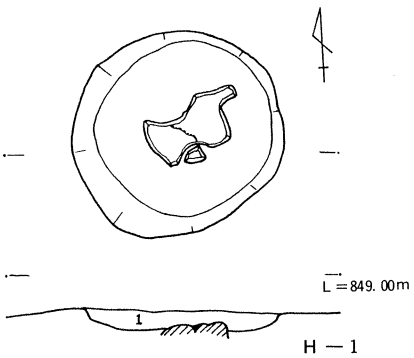
第35図　糀屋敷遺跡　第4･5･6号炉址実測図（S＝1／30）



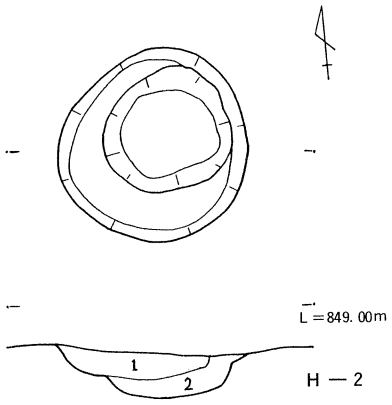
第36図　糀屋敷遺跡　第７号炉址実測図（S＝１／30）



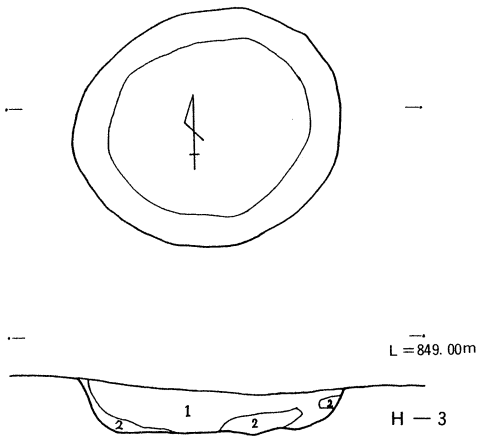
第37図　糀屋敷遺跡　第８号炉址実測図（S＝１／30）



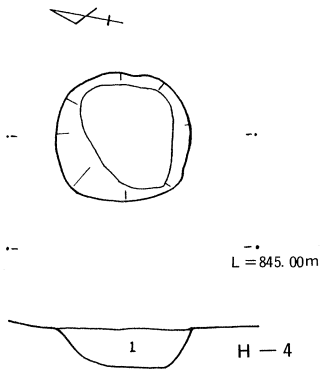
1．黒褐色土層　締り有り、粘性有り
　ロームブロックを少量含む。



1．暗褐色土層　締りやや有り、粘性やや有り、
　小ロームブロックを少量含む。
2．明褐色土層　締り有り、粘性有り(1層より少し強)
　ロームブロックを多量に含む、小礫を少量含む。

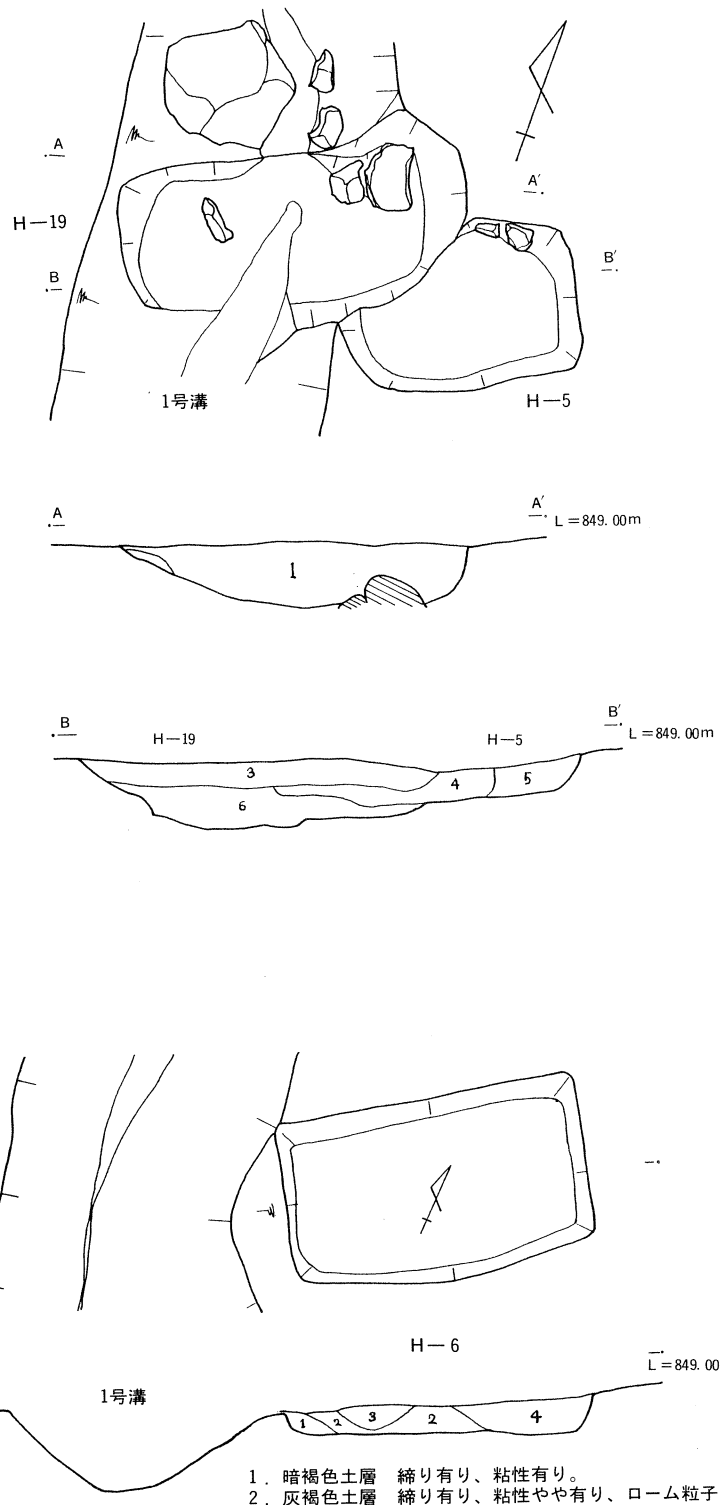


1．褐色土層　締り有り、粘性有り
　大ロームブロックを多量に含む。
2．黒色土層　締りやや有り、粘性強い、
　小ロームブロックを少量含む。



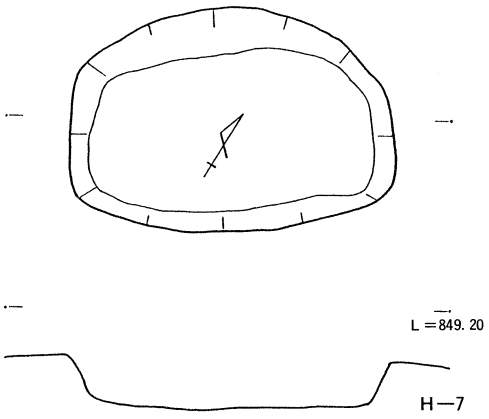
1．明褐色土層　締りやや有り、粘性有り、
　ロームブロックを少量含む。

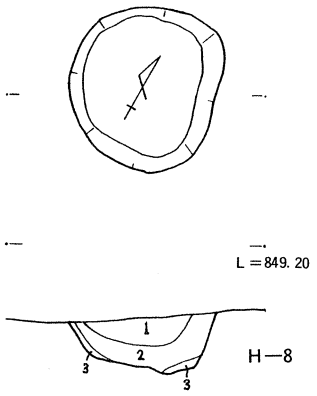
第38図　糀屋敷遺跡　第1･2･3･4号土坑実測図（S＝1／40）



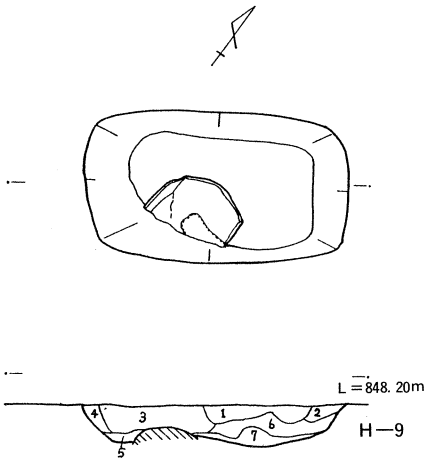
1．暗褐色土層　締り有り、粘性有り。
2．灰褐色土層　締り有り、粘性やや有り、ローム粒子を少量含む。
3．明褐色土層　締り有り、粘性有り、ロームブロックを多く含む。
4．暗灰褐色土層(2よりやや暗い）締りやや有り、粘性やや有り。

第39図　糀屋敷遺跡　第５・６・19号土坑実測図（Ｓ＝１／40）

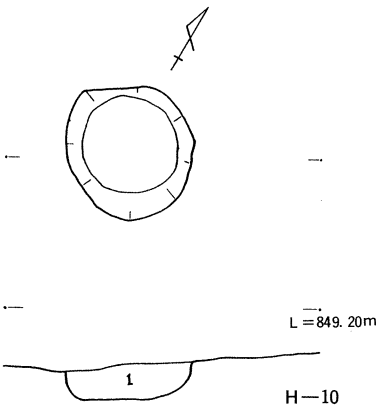




1．暗褐色土層　締りやや有り、粘性やや有り、ローム粒子を少量含む。
2．明褐色土層　締り有り、粘性有り(1層よりやや強い)ローム粒子を微量含む。
3．黄褐色土層　締りあまり無い、粘性あまりない(1層よりやや強い)、ローム粒子を微量ローム粒を多く含む。　(1層より弱い)

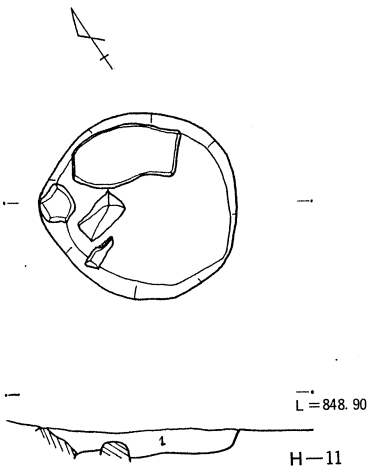


1．黒褐色土層　しまり強い、粘性有、ロームブロックを多く含む。
2．褐色土層　しまりやや強い、粘性やや有、ローム粒子を少量含む。
3．明褐色土層　しまりやや有、粘性いくらか有、ロームブロックの小小礫を多く含む。
4．明褐色土層　しまりやや有、粘性ほとんどなし（3層より弱い）、〔3層より黄色がやや強い〕
5．暗褐色土層　しまりいくらか有、粘性いくらか有（4層より弱い）ローム粒子を多く、ロームブロックを少量含む。
6．暗褐色土層(5層より暗い)しまり有、粘性やや有（2層と同じ）ロームブロックを多く含む。
7．黒色土層　しまりほとんど無し、粘性強い、ロームブロックを少量含む。

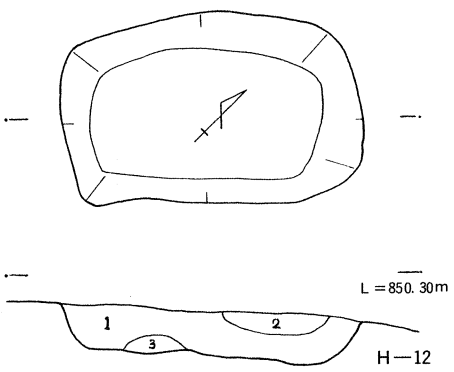


1．明褐色土層　しまり有、粘性やや有

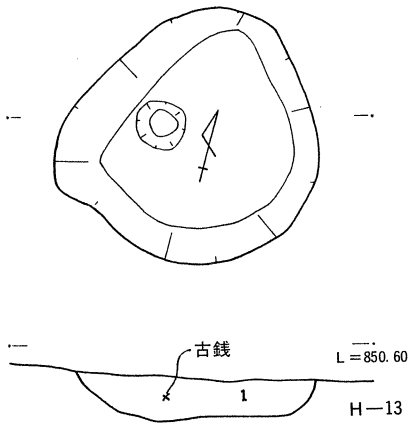
第40図　糀屋敷遺跡　第7･8･9･10号土坑実測図（S＝1／40）



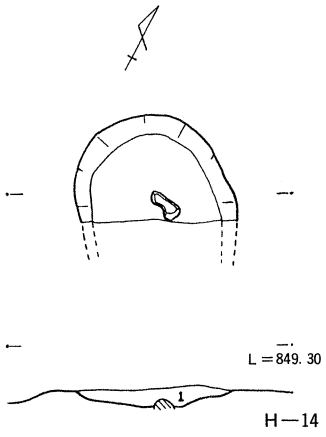
1．暗褐色土層　しまりやや有、粘性やや有、ロームブロックを多く含む（ローム粒子を少し混入する。）



1．明褐色土層　しまり有、粘性有、ローム粒を多く含む。
2．暗褐色土層　しまり有、粘性やや有、ローム粒子を少量含む。
3．明褐色土層　しまりやや強い、粘性やや強い、小ロームブロックを多く含む。

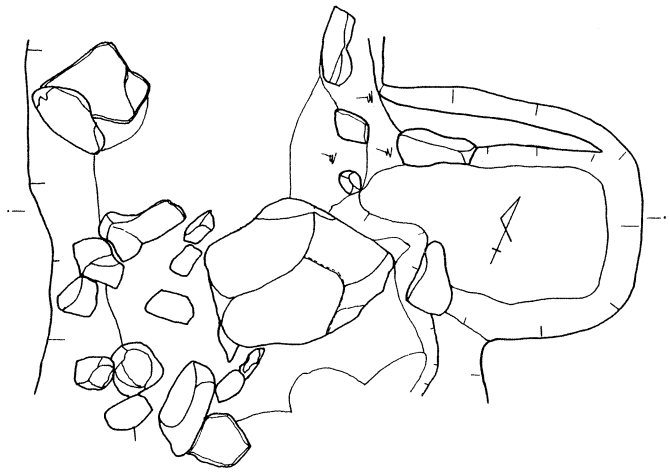


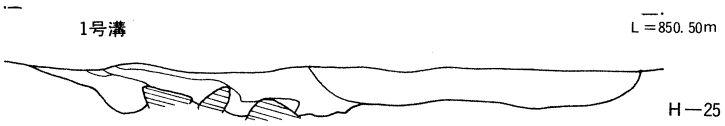
1．黒褐色土層　しまりやや強い、粘性やや強強い、小ロームブロックを多く含む。



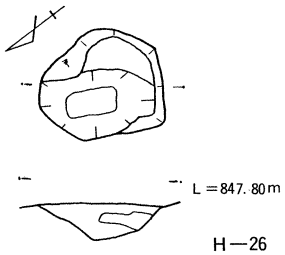
1．暗褐色土層　しまり有、粘性有、炭化物を多く含む、ローム粒子を微量含む。

第41図　糀屋敷遺跡　第11・12・13・14号土坑実測図（S＝1／40）



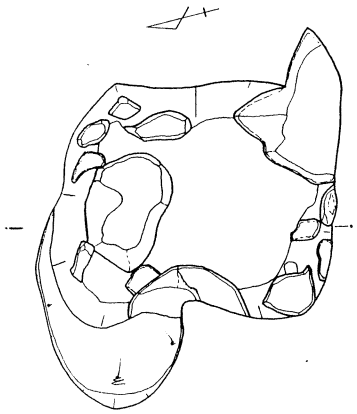


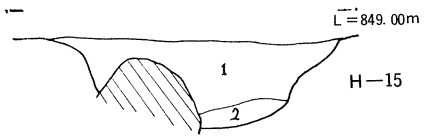
1号溝セクション対応



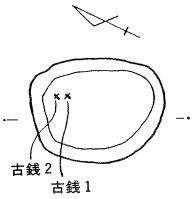
1号溝セクション対応

第42図　糀屋敷遺跡　第25・26号土坑実測図（S＝1／40）

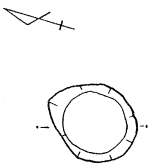


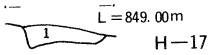


1．暗褐色土層　しまり有、粘性やや有、ロームブロックを多く含む。
2．明褐色土層　しまり有、粘性やや有、ローム粒を多く含む。

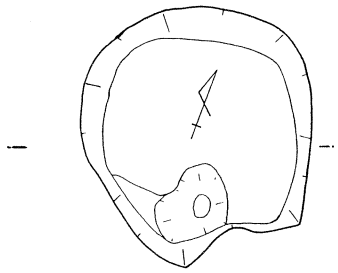


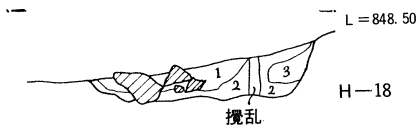
1．明褐色土層　しまりあまりなし、粘性ほとんどなし、炭を少量含む。



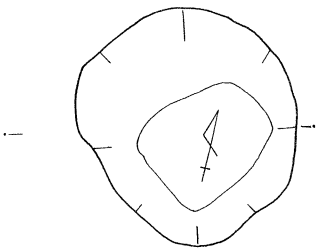


1．暗褐色土層　しまり強い、粘性やや有、ローム粒を少量含む（焼土ブロックあり、炭化物を少し含む）

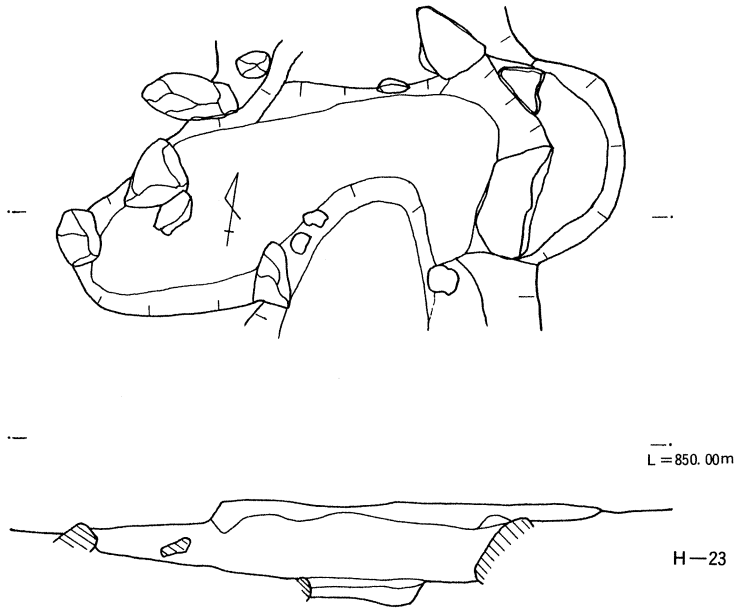


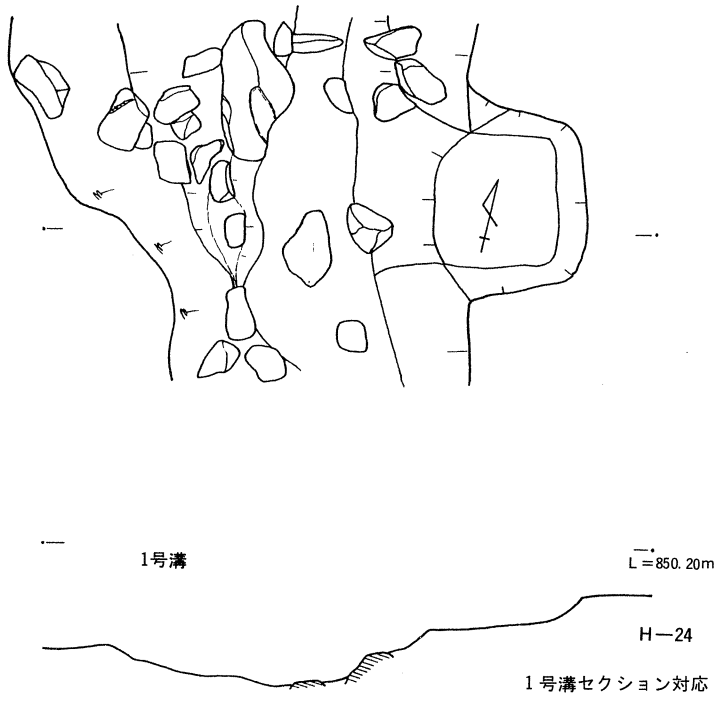


1．暗褐色土層　しまりやや有、粘性強い
2．明褐色土層　しまり有、粘性やや有、炭化物を少し含む。
3．黄褐色土層　しまり強い、粘性ほとんどなし、ロームブロックを多く含む、小礫を少し含む。

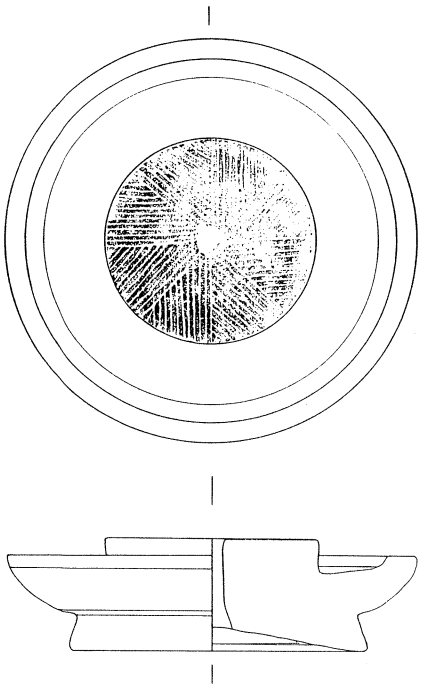


第43図　糀屋敷遺跡　第15・16・17・18・22号土坑実測図（S＝1／40）

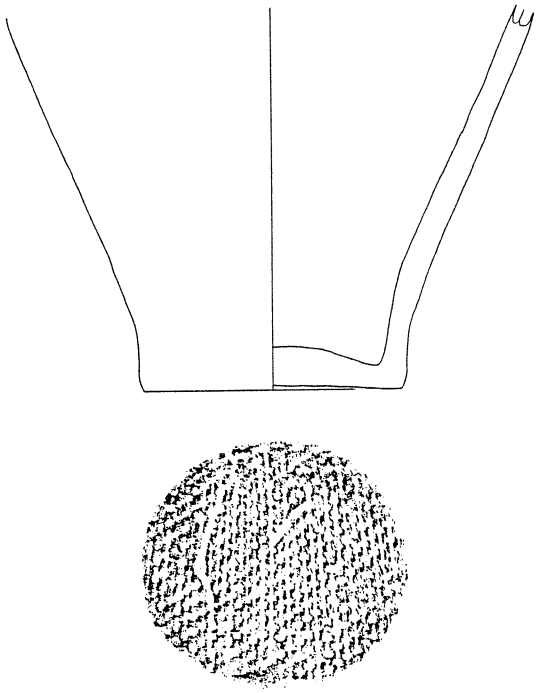




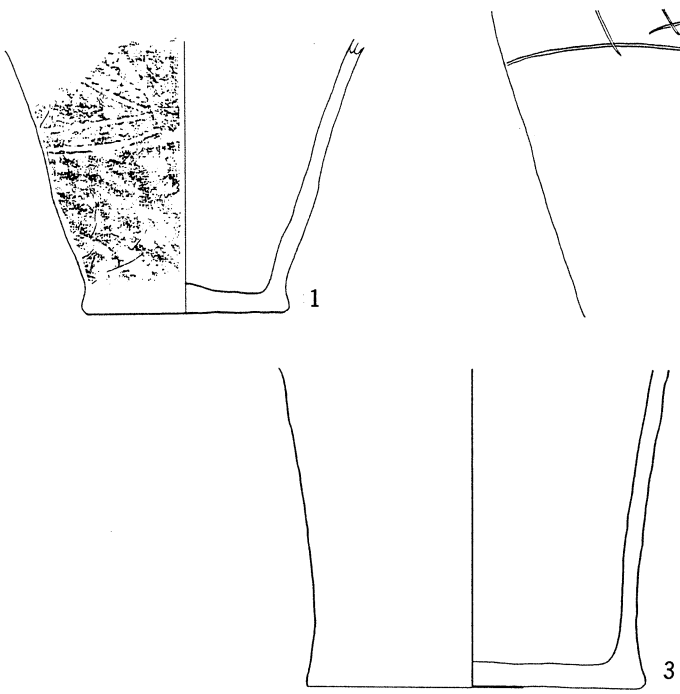
第44図　糀屋敷遺跡　第23・24号土坑実測図（S＝1／40）



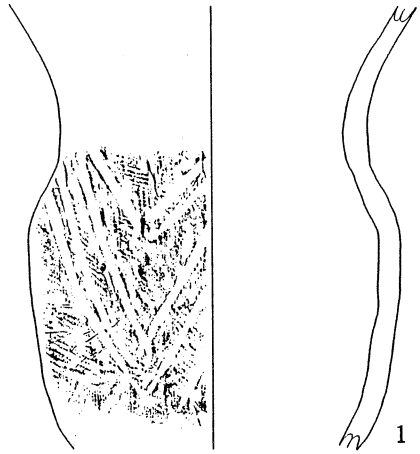
第45図　糀屋敷遺跡 1 号溝出土土器
茶臼実測図（1／8）

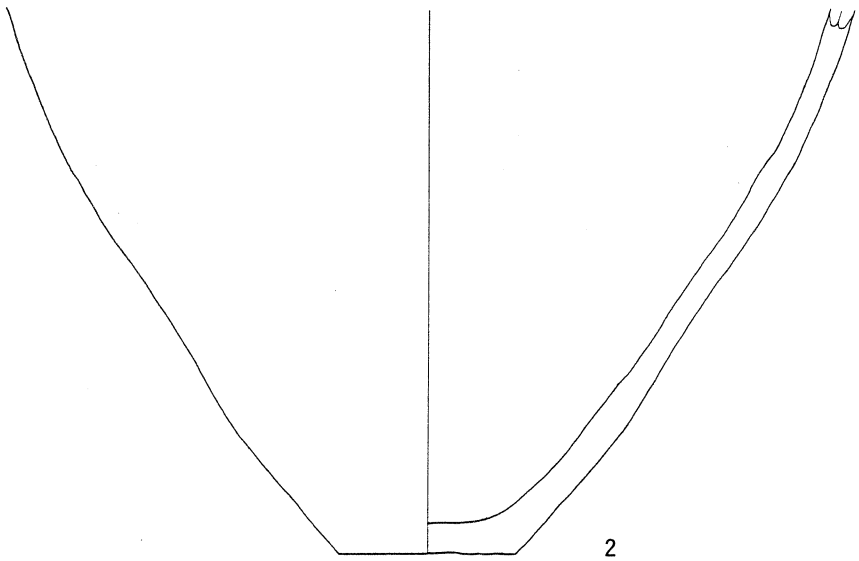


第46図　糀屋敷遺跡第 3 号屋外炉
出土土器



第47図　糀屋敷遺跡　第 7 号屋外炉出土土器





第48図　糀屋敷遺跡　第８号屋外炉址　出土土器

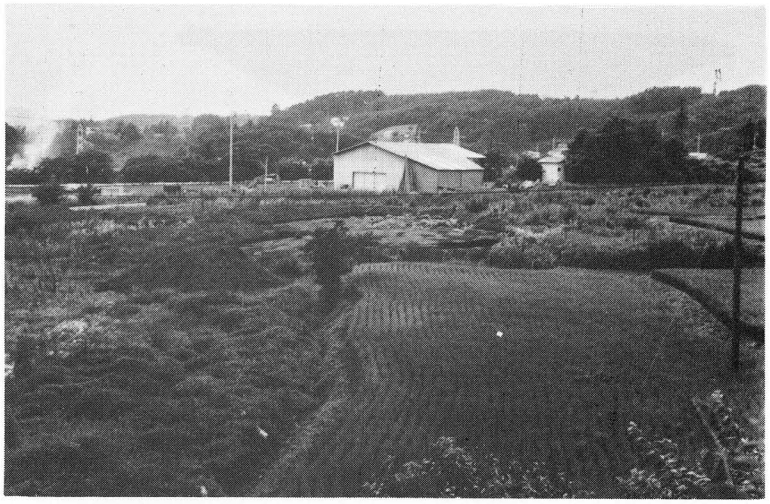
第２表　糀屋敷遺跡土坑一覧表

土坑No.	グリット	形　状	長軸方向	直径(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備　考
1	F－4	円　形	―――	113×107	10		
2	E－4	円　形	―――	101×95	24		
3	E－4	円　形	N61°E	130×128	26		
4	E－5	円　形	―――	70×68	27		
5	E－4	隅丸方形	N60°E	125×90	20		19号土坑及び1号溝と切り合い
6	E－4	長方形	N58°E	158×95	18		
7	D－4	長隋円形	N60°E	170×119	26		
8	F－4	円　形	―――	87×77	30		
9	E－5	隅丸方形	N57°E	138×80	20		
10	E－4	円　形	―――	75×64	18		
11	F－4	円　形	―――	105×96	14		
12	E－2	隅丸方形	N46°E	155×100	25		
13	E－2	不整円形	―――	137×128	24	古　銭	
14	F－4	円形？	―――	55×77	9		南半分攪乱により不明
15	F－4	四角形	―――	142×120	46		テラス有
16	F－4	隅丸方形	N33°W	69×57	5	古　銭	
17	F－4	隋円形	N10°E	50×40	12		
18	D－5	不整円形	―――	135×120	30		2号溝と切り合い
19	E－4	隅丸方形	N60°E	181×94	35		5号土坑と1号溝と切り合い
22	C－5	円　形	N54°W	117×110	31		
23	E－3	隅丸方形	N70°E	295×105	40		1号溝と切り合い
24	E－3	隅丸方形	N77°E	80×97	15		
25	E－2	隅丸方形	N75°E	174×130	19		
26	B－6		―――	65×57	19	縄文式土器	テラス有

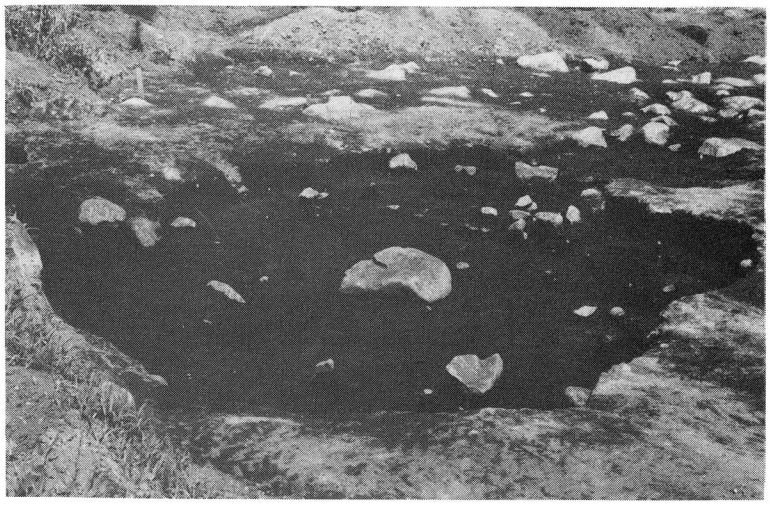
註：（　）内の数字は現在する部分の計測値

第20、21号土坑は欠番

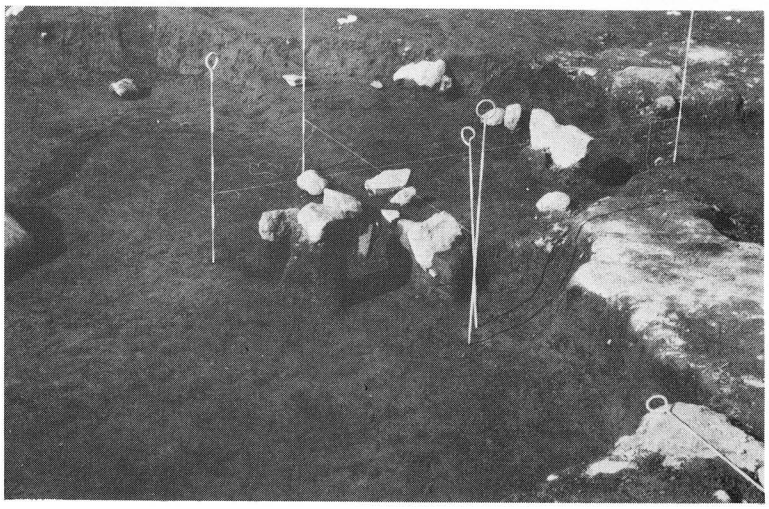
図版一1



深草遺跡
近景（東から）

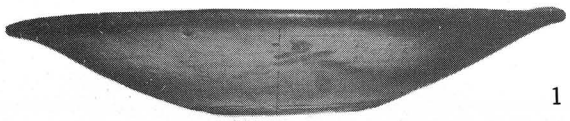


深草遺跡
第1号住居址

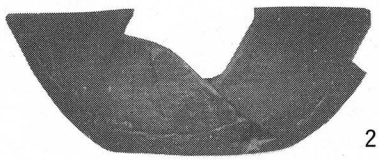


深草遺跡
第1号住居址
カマド

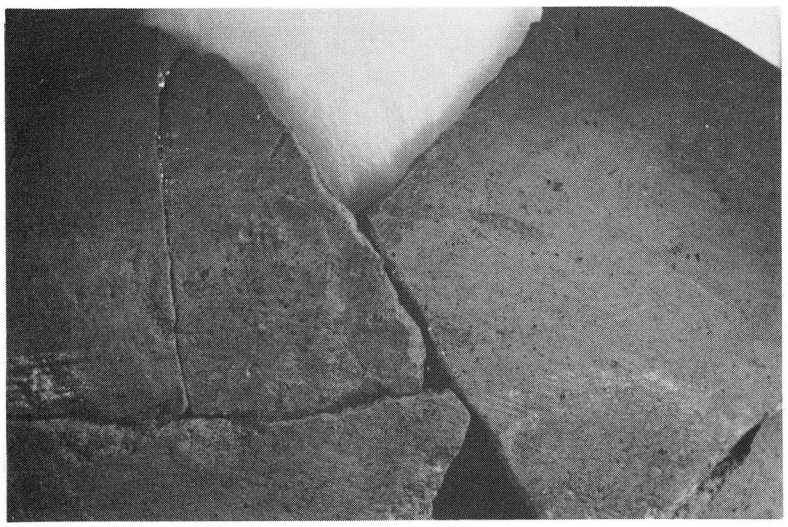
図版一 2



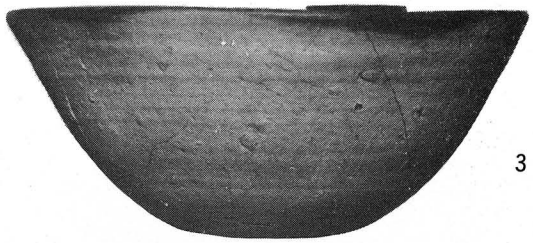
1



2



深草遺跡
第1号住居址
出土遺物



3

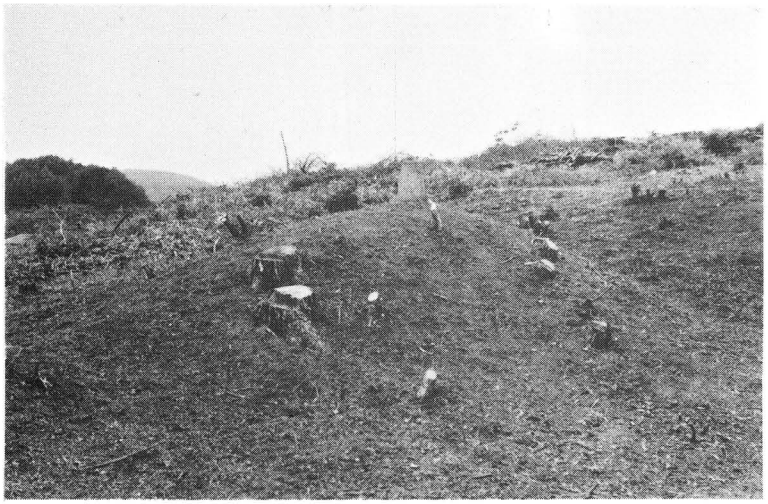
4

深草遺跡　第1号住居址　出土遺物

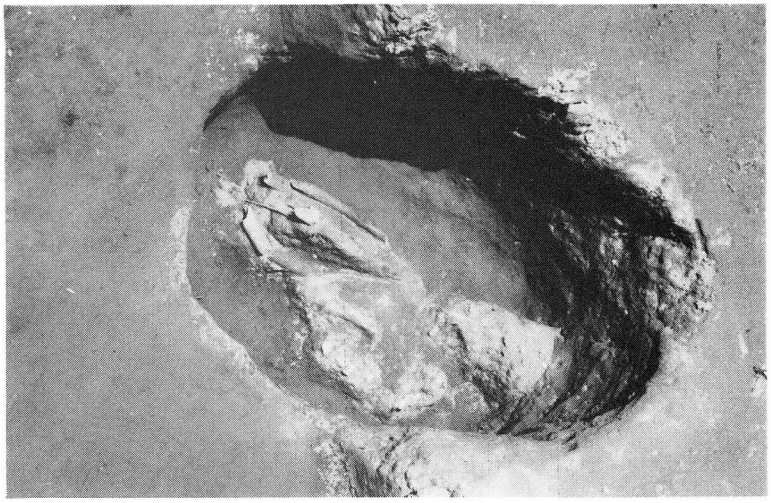
図版— 4

別当十三塚遺跡
遠景（東から）

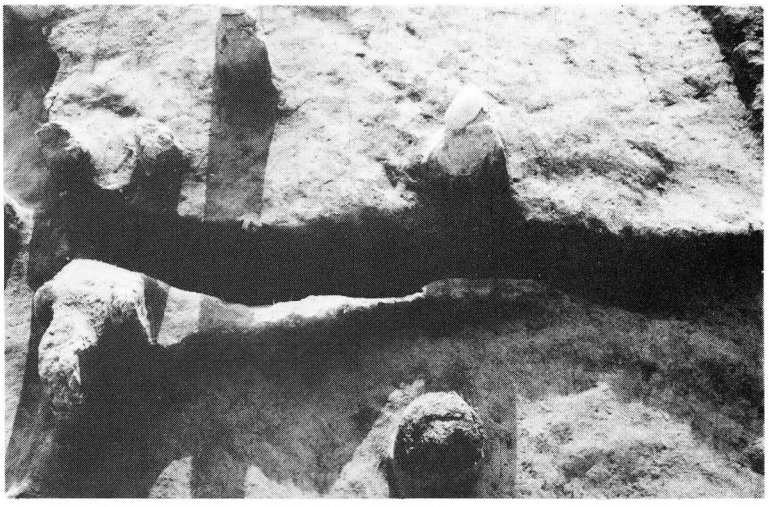
別当十三塚遺跡
第２号塚



別当十三塚遺跡
第３号塚



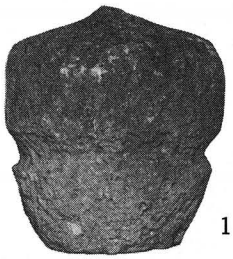
別当十三塚遺跡
第 4 号塚
1 号土壙人骨

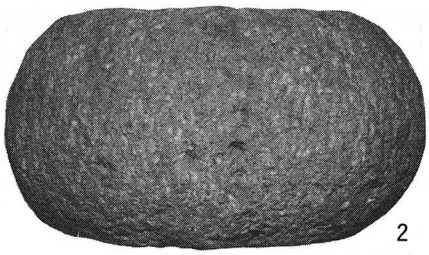


別当十三塚遺跡
第 4 号塚
1 号溝状遺構

別当十三塚遺跡
第 5 号塚

図版一 6

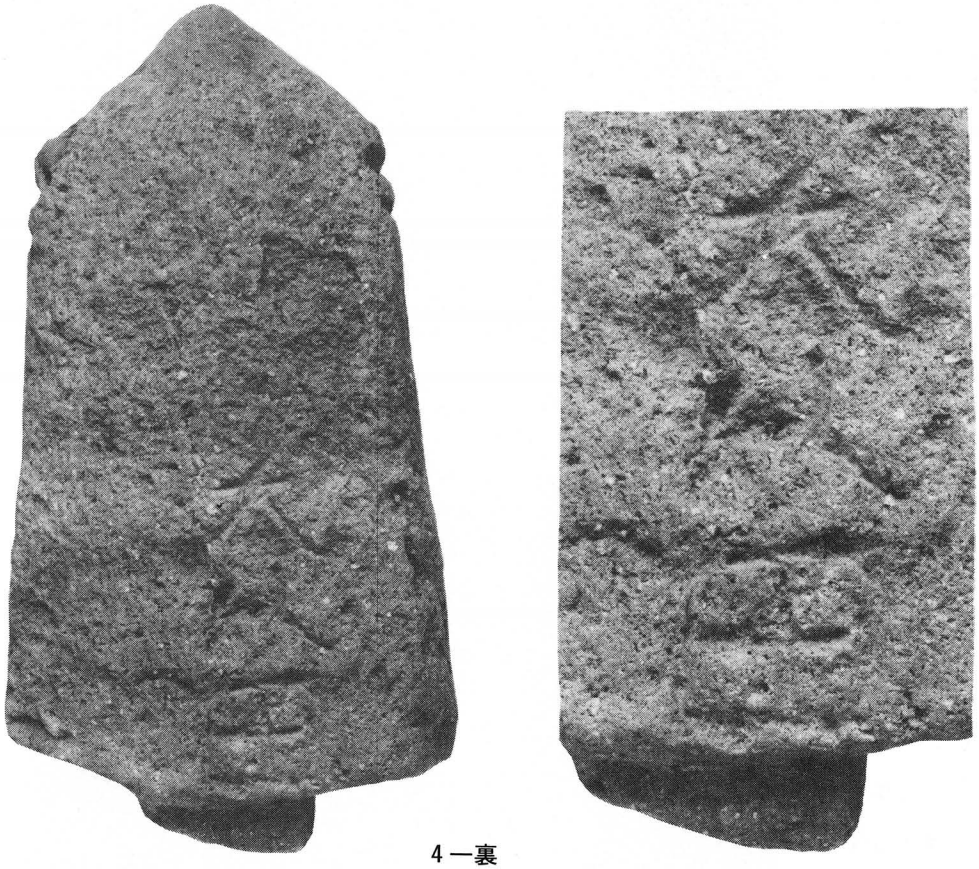

1


2

3

4 一表

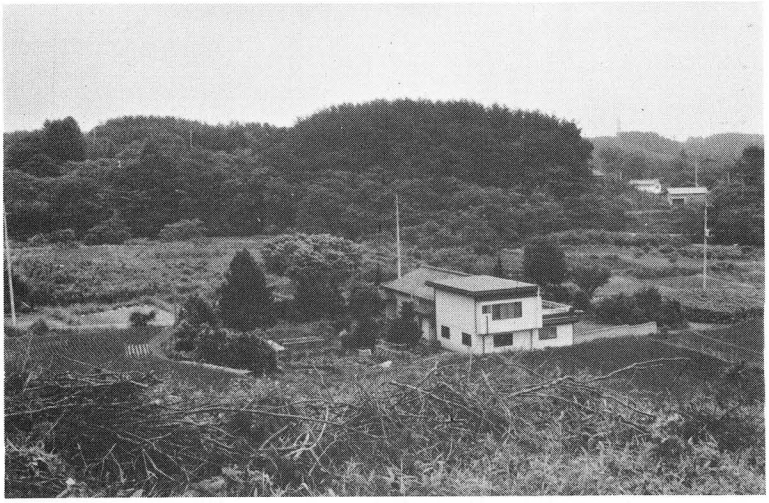
別当十三塚遺跡　石造物（1）



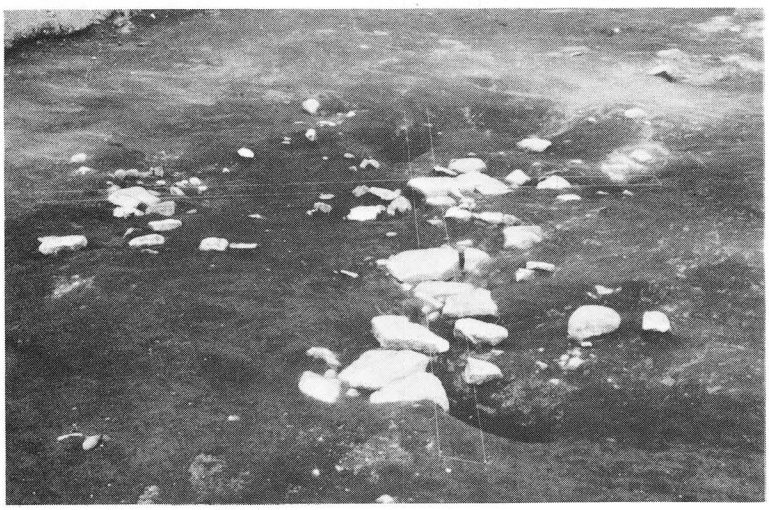
4 一裏

別当十三塚遺跡　石造物（2）

図版— 8

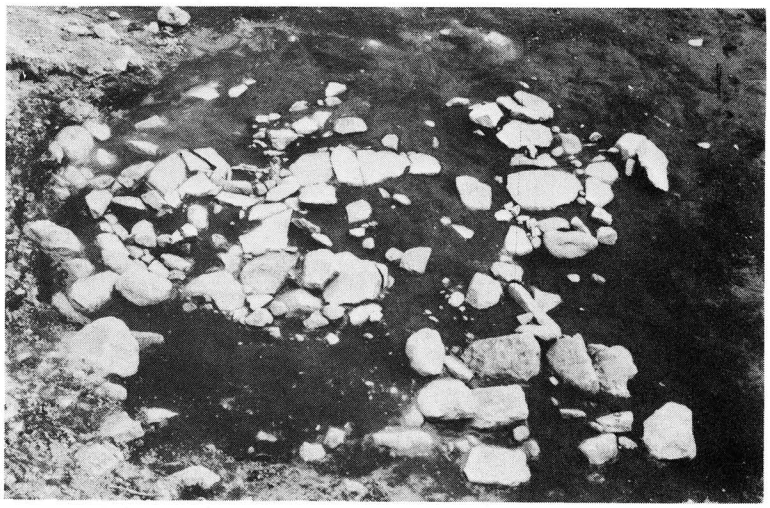


別当遺跡
遠景（東から）

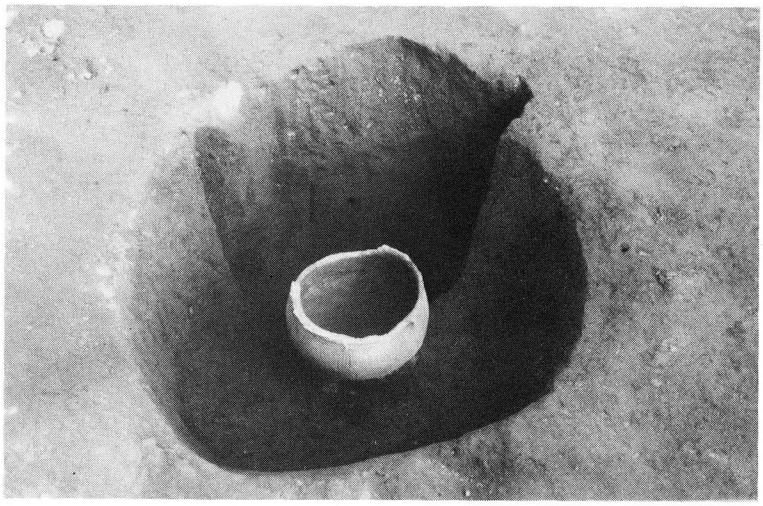


別当遺跡
第１号住居址

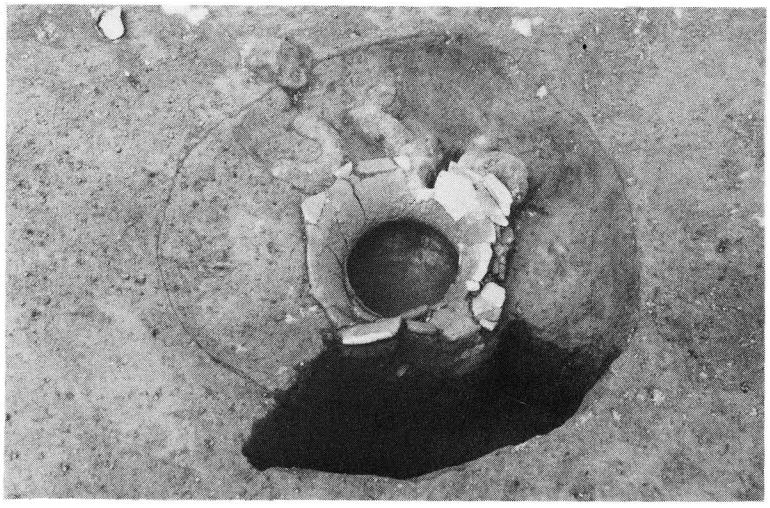
別当遺跡
第１号住居址
掘り方



別当遺跡
第1号住居址
炉体土器

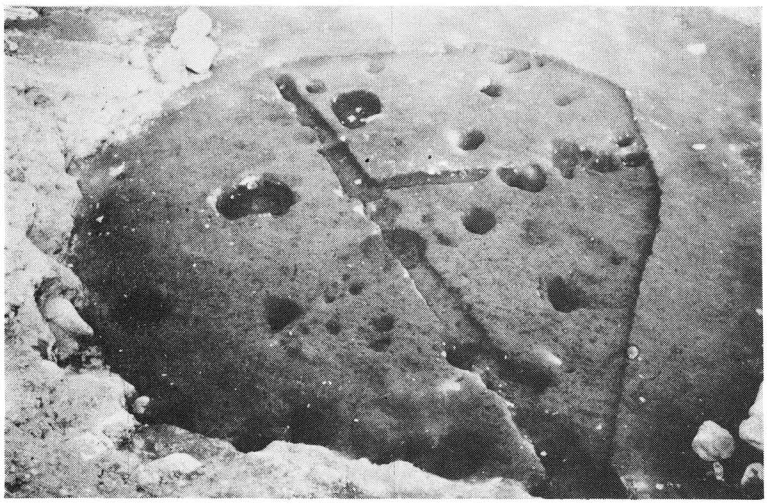


別当遺跡
第1号住居址
炉掘り方

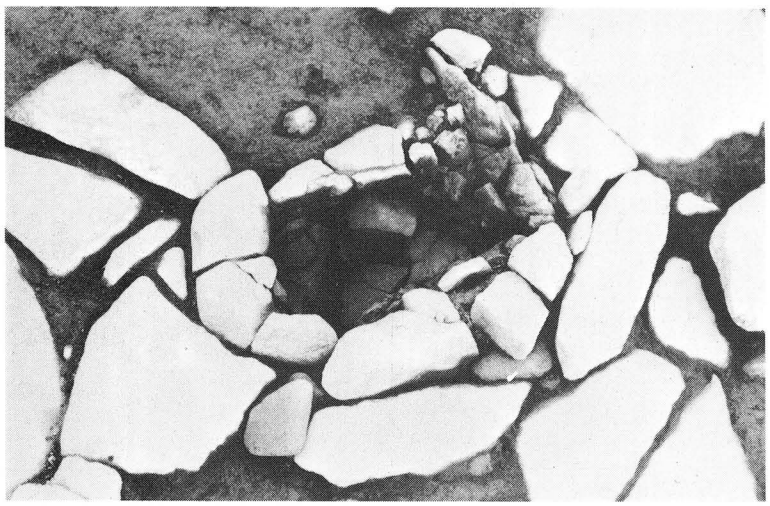


別当遺跡
第2号住居址

図版—10

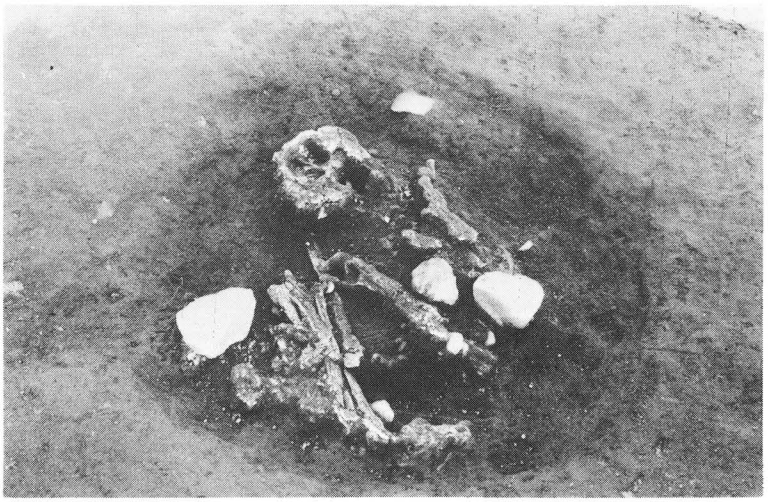


別当遺跡
第2号住居址
掘り方

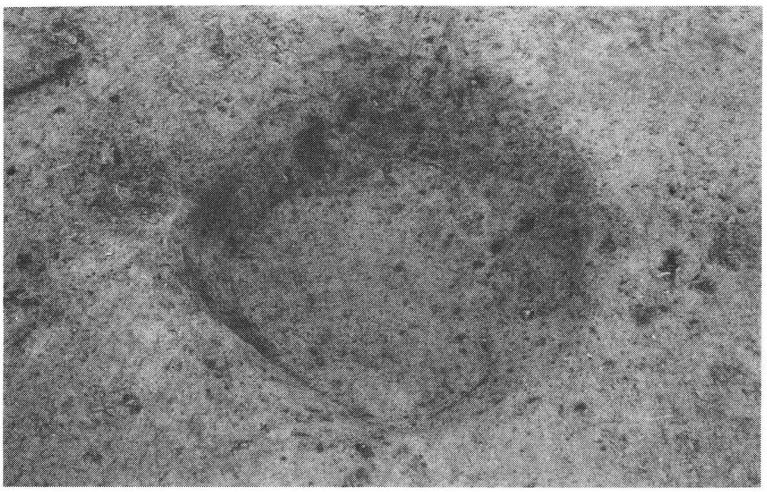


別当遺跡
第2号住居址
炉址

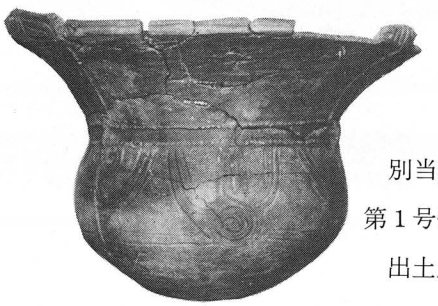
別当遺跡
第2号住居址
炉体土器



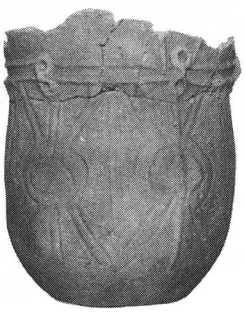
別当遺跡
第４号土壙
人骨出土状態



別当遺跡
第４号土壙
掘り方



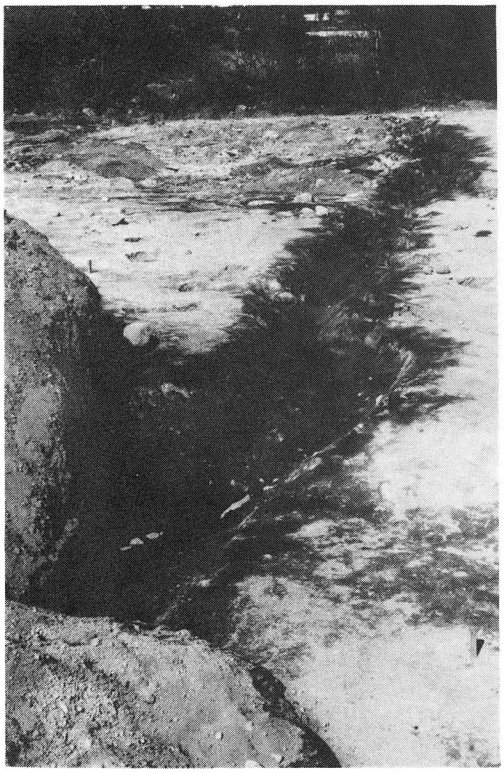
別当遺跡
第１号住居址
出土土器



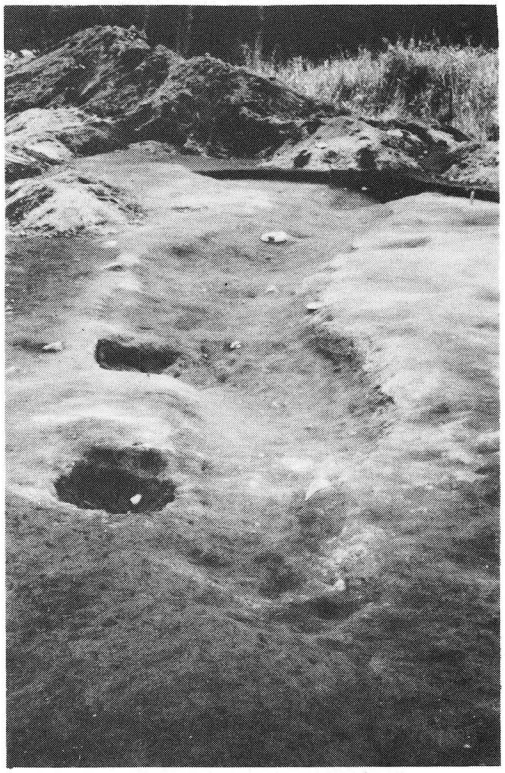
別当遺跡
第２号住居址
出土土器

図版—12

糀屋敷遺跡
第１号溝内
石臼出土



糀屋敷遺跡　第１号溝（南から）



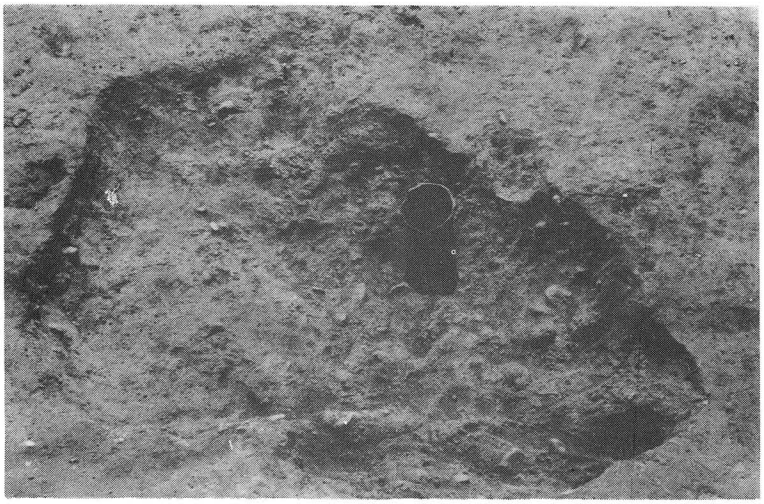
糀屋敷遺跡　第２号溝（北から）

糀屋敷遺跡
第３号炉址
炉体土器

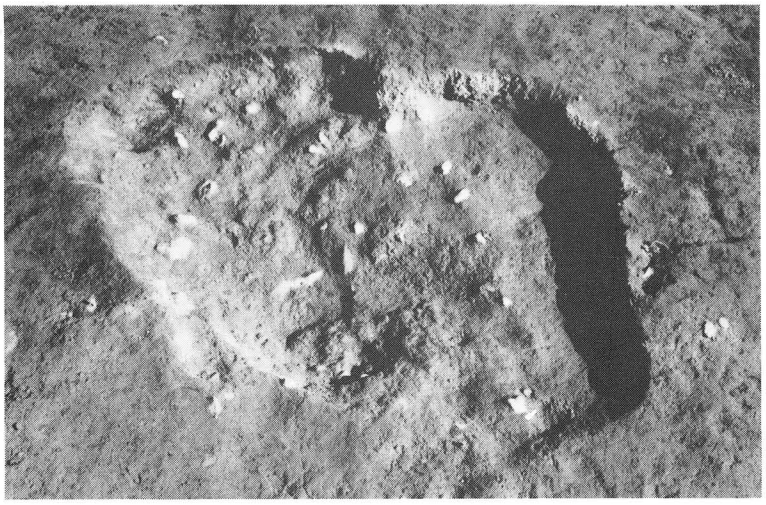
糀屋敷遺跡
第３号炉址
完掘状態

糀屋敷遺跡
第７号炉址
炉体土器－A

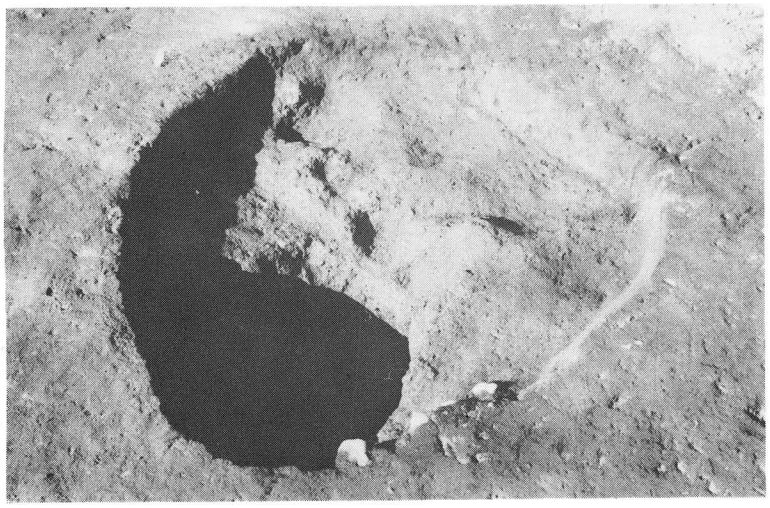
図版一14



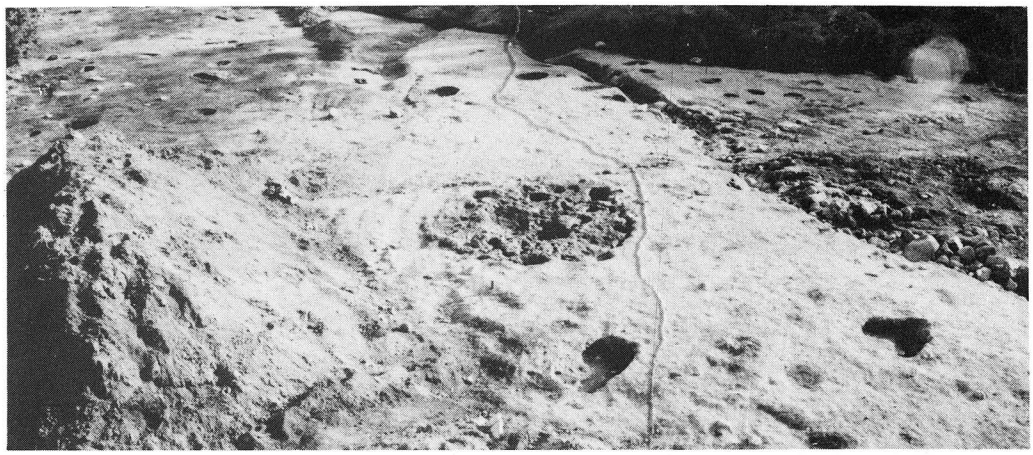
糀屋敷遺跡
第7号炉址
炉体土器—B



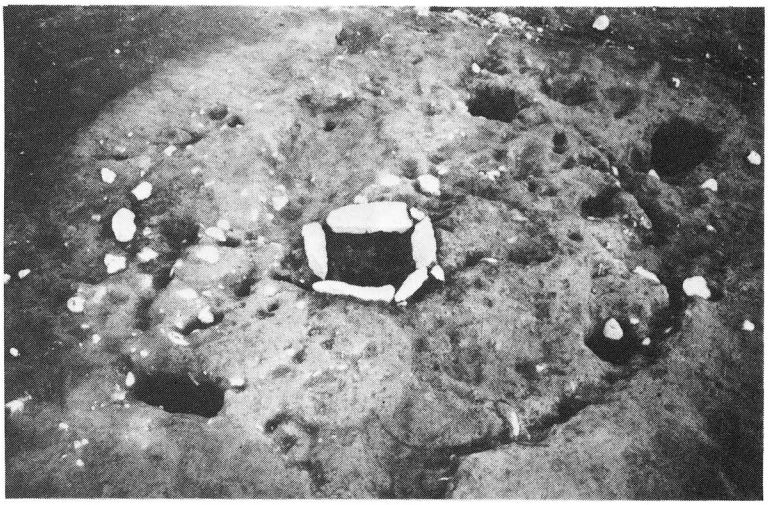
糀屋敷遺跡
第7号炉址
完掘状態



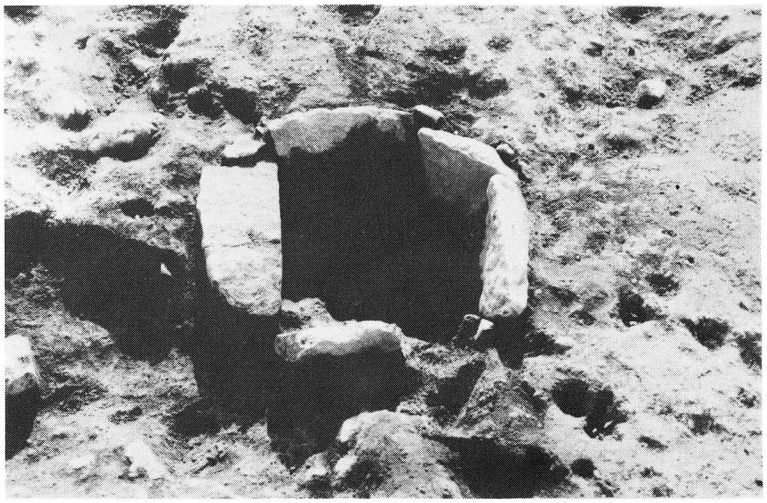
糀屋敷遺跡
第8号炉址



糀屋敷遺跡近景（北から）

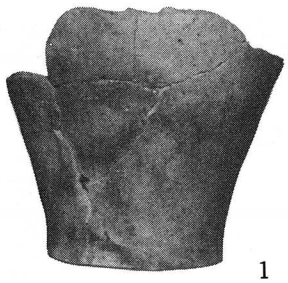


糀屋敷遺跡
第1号住居址



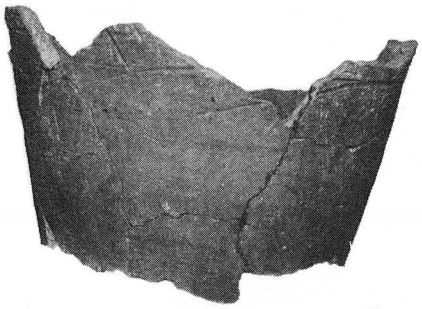
糀屋敷遺跡
第1号住居址
石組炉址

図版—16

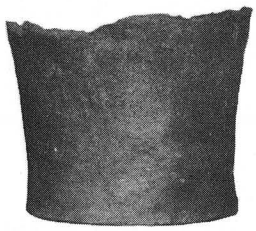


1

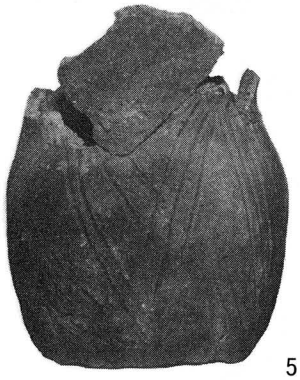
2



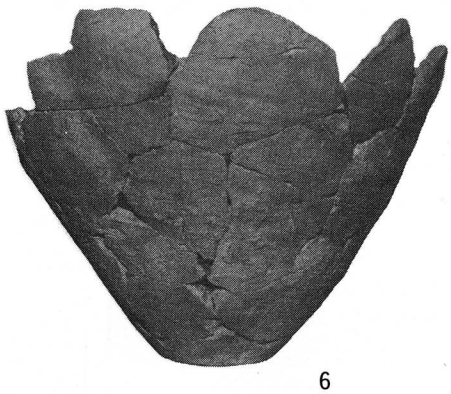
3



4



5



6

糀屋敷遺跡出土土器

（1…3号炉址、2～4…7号炉址、5・6…8号炉址出土）

長坂町埋蔵文化財発掘調査報告　第４集

深草遺跡・別当十三塚遺跡
別当遺跡（第２次）・糀屋敷遺跡

発　行　日　　１９８７年３月３１日

編集・発行　　長坂町教育委員会

印　　刷　　峡北印刷株式会社